

527  
36

人間意識の發達  
地方改善事業叢書  
第四編



始





地方改善事業叢書

福岡女子  
專門學校  
校長

小林照郎氏講演

# 人間意識の發達

財團法人  
中央社會事業協會  
地方改善部

第四輯



地方改善ニ關スル内務大臣ノ訓令  
内務省訓令第二十二號

北海道廳 府 縣

國家ノ健全ナル發達ハ國民ヲシテ各其ノ志ヲ遂ゲシメ國內諸方面ニ亙リテ相互ニ克ク協調諧和ノ實ヲ舉グルニアリ予ノ内務ノ局ニ當ル常ニ此ノ心ヲ以テ事ニ從ヒ其ノ實行ヲ期センコトヲ念トセリ願ルニ明治維新ノ初 先帝畏クモ五箇條ノ御誓文ヲ發セラレテ舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベキ旨ヲ宣シ給ヒ尋テ明治四年八月太政官布告ヲ以テ一部國民ニ對スル從來ノ稱呼ヲ廢シ身分職業共ニ何等差別ヲ設ケザル旨公布セラレタリ爾來茲ニ五十有餘年此ノ間中央地方相共ニ力ヲ合セテ地方改善ノ事業ニ勉メ其ノ成績漸次見ルベキモノアルヲ致セリト雖然モ今尙國民ノ間ニハ因襲的偏見ヲ脱却スル能ハズ依然トシテ融和ヲ缺クノ憾ナシトセズ今ヤ世界ノ各國ハ人類相愛ノ大義ニ依リテ社會ノ平和幸福ノ増進ニ銳意其ノ力ヲ致シツツアルノ秋徒ラニ差別的偏見ニ捉ハルルガ如キコトアラムカ是實ニ社會ノ圓滿ナル發達ヲ期スルノ途ニアラズ各位ハ地方改善ノ基調先ノ差別的偏見ヲ絶ツニアリテ念ヒ克ク此ノ趣旨ノ普及徹底ニ勉ムルト共ニ最モ剴切有效ナル計畫ヲ立テ國民相愛ノ實績ヲ舉グルニ於テ遺算ナキヲ期セラレベシ

大正十二年八月二十八日

内務大臣

水野鍊太郎

人間意識の發達







人間意識の發達

大正  
14. 4 22  
寄贈

發行所寄贈本

[Faint, illegible text visible through the paper from the reverse side of the book]



例言

本叢書は財團中央社會事業協會地方改善部大正十二年度事業の一として福岡市(九州方面)、廣島市(中國方面)、京都市(近畿方面)、津市(東海方面)、金澤市(北陸方面)、埼玉縣熊谷町(關東方面)の六ヶ所に於て開催地府縣と本協會と聯合主催の下に、其附近の各府縣より推薦された講習員に對し、斯道の専門講師を聘して融和促進に關する講習會を開いた際の講義の速記を印刷したるものであります。

人間意識の發達

◇目次◇  
上篇

327-36

一 社會の健全なる發達	一
二 社會病理學	三
三 宗教と社會主義(人間本質の影)	五
四 文化病	八
五 社會の頹廢的氣分	一〇
六 進歩か退歩か	二二
七 社會均衡論	三三
八 老人の支配	四四
九 男性中心主義	五六



一〇 尊僧主義	一八
一一 軍國主義	一九
一二 軍國主義と産業主義	二〇
一三 社會相對性原理	二三
一四 結合と分離	二五
一五 男性と女性	二六
一六 政黨の社會學的研究	二八
一七 商工本位主義	三〇
一八 中庸主義	三〇
一九 社交性	三一
二〇 協調主義	三一
二一 社會平衡の六箇條	三六
二二 人種差別觀念	三八

二三 第一回萬國人種會議	四〇
二四 人種感情	四二

下 篇

一 人の本質	四四
二 動物性と人間性	四七
三 動物性(アニマリチー)(其の一、食ふ問題)	四八
四 動物性(アニマリチー)(其の二、性慾問題)	五一
五 人間の特性	五四
六 用不用の法則	五九
七 誤れる文化生活	六二
八 新思想か舊思想か	六四
九 原始社會の男女	六六
一〇 女性中心説	六七



一一	禁慾の教……………	七二
一二	人間意識の發芽……………	七六
一三	人間意識の發達……………	七六
一四	婦人の自覺……………	八一
一五	世界の趨勢……………	八四
一六	所謂差別待遇について……………	八五
一七	感情について……………	九〇
一八	客觀に世間を見よ……………	九三

# 人間意識の發達

福岡女子専門學校長 小林照朗氏講演

上篇

## (一) 社會の健全なる發達

今回の講習會のことを若し今少し前以て承つて居りまして準備の時間を得られま  
 たならば、私の専門は社會學でありますから、階級意識の發達と云ふやうな事を少し  
 此の機會に自身にも調べてお話しして見たいと思つたのであります。丁度東京へ出張  
 中に御依頼を受け、東京に長らく居つて只今歸つたばかりの處でありますから、其の  
 方面の準備も出来兼ねましたので、只今御紹介されました様に「人間意識の發達」と  
 云ふ題で今回はお話しして見たいと思ふのであります。

吾々が斯うやつて世の中に群を成して社會生活を營む、或は國家生活を營む、即ち  
 之を團體と云ふ。此の團體と云ふものを一つの對象として研究する學問が近世科學の



一である所の社會學であります。此の團體と云ふものは一體どんなものであるかと云ふことに付きては、必ずしも二十世紀若くは十九世紀に至つて初めて人々が考へた事ではないのであつて、西洋の文献の上で一番古い例をいへばプラトニー(Plato)と云ふ希臘の學者を茲に擧げることが出来るのであります。此の人は國家と云ふものを人間に比較したのであります。即ちこの人は團體たる國家は恰も一個の人間と同じ様なものであると云つた。十九世紀になりまして、社會は有機體であるとか、或は更に進んで社會は意識體であるとか云ふ様に、社會は組織立つた一つの精神である生きたものであると云ふやうな考が段々發達して參りましたが、其の事は畢竟するに約二千年前のプラトニーが國家を人間に比したと云ふことを以て最も古き而も今日まで影響を及ぼして居る學說であると思ふことが出来ると思ふ。プラトニーは、人間に於ては頭と云ふものが非常に貴重なるものであると同様に、國家に於ては政府が其の頭であり、又人間に於ては手足と云ふものが色々用を辨する爲に働くと同様に國家に於ては、商人が人間の手足に喩へ得べきものであると云ふ風なことを申して居ります。吾々お互に此身體が健全な發達をする爲には言ふ迄もなく頭から手足に至るまで均等に發達せなければならぬと云ふことは極めて明な、平凡な、而も間違ひのない重要な事であらうと思

ふ。頭だけが發達しても駄目である、手だけが發達しても駄目である、足だけが發達しても駄目であります。身體を良くする爲に色々運動をする人がありますが、手ばかり運動して居ると手ばかり發達する。車夫のやうに足ばかり運動して居ると足のみが發達する。所謂四肢の均等なる發達と云ふことは出来ない。四肢の均等なる發達をさせない身體は本當に健全なる身體と云ふことは出来ないと思ふ。之と同じく、既に國家と云ふものが、或は社會と云ふものが、之を人間の身體に喩へ得るとするならば、どんな社會が健全な社會か、どんな國家が健全な國家かと云ふならば、丁度人間は頭から足の尖までが均等に發達しなければならぬと同じ様に、國家に於ても社會に於ても如何なる部分に働いて居る人も皆均等な發達をして、どの部分の人も展び得る様に出て居らなければならぬ。さう云ふ世の中でないならば其れは不健全な世の中である、病的の世の中であると云ふことを私は斷言して憚らないのであります。

## (二) 社會病理學

社會學の一派に「社會病理學」と云ふことを申す學者があります。是は英語のソシアル・パソロジー、(the social pathology) 即ち世の中の病氣を治すと云ふ見地から世の中



を研究しやうといふ研究の仕方でありませぬ。人間に病氣がある如く世の中にも亦病氣がある。世の中の病氣とは一體どんなものかと申しますと、吾々人類が社會生活を完全に營んで行く上に直接間接妨げとなるものがあるならば、さう云ふものを研究して取り除く様にしなければならぬ。言換へれば社會組織若くは社會の機能の中に不健全なものがあるならば其の不健全な部分を取除いてしまはなければいけない。さう云ふ研究をするのが今日の學問として必要な事である。之に對して社會病理學と云ふ名を附けたのであります。今日は社會病理學の話をしやうと思ふのではないが、今日の世の中を病的の世の中と観ると云ふ見方は随分數多く有らうと思ふのであります。例へば昔から唱へられて居る宗教の如きも矢張り此の世の中を病的のものと觀て居る。此の世を穢土と云つて居る。穢れた世——穢い世——こんな浮世に執着せず、所謂厭離穢土欣求淨土などと申しまして、彼の極樂淨土を希ふと云ふやうな思想があるのは、畢竟するに此の世の中を眞の理想の世の中、眞の健全なる世の中と観ない傾向のものであらうと思ふ。今日世間に八ケましく論せらるゝかの社會主義、此の社會主義の立場は宗教の立場とは一寸見た所は非常に異つては居りますけれども、私は或る見地から考へまして、社會主義的思想の因つて起つて來る所も、矢張り宗教的思想の因つて起

つて來る所と其根源に於て幾分共通して居る所がありはせぬかと思ふのであります。それは何故であるかと云ふに、社會主義には色々の差別あるも、要するに今日の社會組織に不平がある、今日の世の中を以て理想の世の中として居らぬ。斯う云ふ點に於ては確に宗教の或る點と一致して居ると思ふのであります。唯異なる所は、社會主義に於ては自分の理想を直に此の現在に於て實現せんとする。宗教に於ては、此の世は到底理想の世でない、又人間の壽命と云ふものも爾う長いものでない、であるから此の世に於ていなく所謂彼岸に於て即ち未來の天國若くは極樂淨土に於て理想の天地を見出さうとする。斯う云ふ點に於て異つて居る。是は單に思想上の事を云ふのである。社會主義としては其の中に色々の區別があること故一概に言ふ譯には行かぬが、社會主義の思想の源泉には現社會に不平であると云ふ點に於て今申した様な處があらうと思ふ。要するに宗教なり社會主義なり孰れも現世を以て理想の天地とは觀て居らない、健全な世界とは觀て居らない、即ち病的の世の中と觀て居ると云ふ所に稍々其の揆を一にして居る點があると思ふ。

(三) 宗教と社會主義 (人間本質の影)



一寸話は横に入りますが、世の中の人には或は斯う云ふことを言ふ。現代の如く科學が非常に盛んになり文化が進歩して來た以上は宗教と云ふものは段々衰へる、人間の文明が進んだならば宗教が無くなるであらう、畢竟するに宗教は科學的知識から云ふと迷信に過ぎないと、斯う云ふ論者がありますけれども、私はそれは斷じて誤りであると信じて居る一人であると同時に、社會主義或は社會運動或は社會主義的運動を撲滅せんとする態度の人世の中に多いけれども是も不可能の事であると、信じて居るのであります。

何故左様に申すかといふと、私は今日の宗教に付ても又今日の社會主義に付ても、表面に現れて居る形式的宗教若くは表面に現れて居る彼の社會主義の運動、斯の如きものは只一つの影に過ぎない。實體ではない、影に過ぎない、と斯う思つて居る。然らば本當の實體は何處に在るか云ふに、御同様人間の本質に備はつて居る宗教心、人間の本質に備はつて居る不平不満の心理、唯是れが影となつて映つて居るのが彼の宗教である。影となつて一部に現れて見えて居るのが彼の社會主義運動である。若し眞に宗教を迷信なりとして撲滅せんとするならば人間をやめて仕舞ふより外に途がない。若し眞に社會主義を根本的に撲滅せんとするならば人間を全部殺してしまふより

外に途がない、何故ならば吾々人間の**本質を解剖して見ますと、其處に宗教心と云ふものも非常に根強く有つて居る、其處に現代社會に對する不平不満もお互に有つて居る。**是が偶或る形に現れたのが今言ふ如きものであると私は思ふ。其の證據には、世が段々進んで參つて二十世紀になつたと申しましたが、表面には色々の理窟を言つて居る人も、扱まさかの時になると、何等か神佛若くばある偉大なる力にすがらうとする。之が宗教心ではなからうか。早い話が、葬式を一つする場合に、人間は死んだらもうそれまで、別に何も要らぬと平素は云つて居つても死骸を其まゝで片付けるかと云ふと然うは行かない。こうなると餘程其處に説明を要するものがあるが、今日の話は其の方面のことをいふ積りでないから是に止めて置きますが、社會主義がやはり然うです。社會主義が悪いとは云ひながら、今日如何なる國家に於ても社會主義的政策が段々用ひられて居る。租税を取り立てる方法に於ても其の他の事柄に於ても着々社會主義的政策は何處の國家に於ても之を實行するに吝ならぬ。唯極端な社會主義は健全なる社會組織を脅威する如き危険思想は飽迄も國家としては之を撲滅しなくてはならぬ。方針を誤つて信じて居る者があれば其の誤りであることを論すやうに教育なり其の他の方法に依つて之を矯正せなければならぬと思ふ。勿論私が今申しました



ことは所謂宗教思想、所謂社會主義的思想の根本に付ての立言でありまして、だからと云つて淫祠邪教を奨励して宜いと云ふ譯でないと同様に、だからと云つて今日形の上に見れて居る彼の無政府主義、彼の共產主義などを少しでもとるべき所ありと云ふ考は毫頭無いのであります。唯お互に人間の本质に於て、今日の世の中を極めて理想の天地と思つて居らぬ不平不満の聲があると云ふことを申したので、さうして彼の社會主義者、彼の宗教家が、現在の社會、現在の世の中に對する考へ方が現代社會を一種の病的社會と觀て居る傾向の中に入れ得ると云ふことを申したのであります。

#### (四) 文化病

更に進んで申しますならば、科學者の中にも、現在の吾々が憧がれて居る文明文化をすら是は一種の病的のものであると云ふことを唱へて居る人があります。此の人の立場は彼の宗教家の立場とは違ふ、彼の社會主義者の立場とは違ふ。而も現代の文明を以て一種病的のものであると云ふ點に於ては稍々其の揆を一にして居ると、斯う謂へると思ふ。それは誰かと申しますと、英國のカーペンター(Carpenter)の如きを其の一人に擧げることが出来ると思ひます。カーペンターは何う云ふ考を述べて居るか

申しますと、文明は一つの病氣だ、今の文明國民は文明病と云ふ病氣に罹つて居る。さうして凡そ如何なる民族でも一度は此の文明病と云ふ病氣に罹る。丁度子供が大きくなる迄の間には必ず麻疹に罹ると同じ様に、民族が發展すると必ず文明病と云ふ病氣に襲はれる。さうして丁度麻疹に罹つた子供の経過が同じ様である如く文明病に罹つた民族の経過も殆ど同じ様なものである。何處の國でも文明國となるに其の経過は同一であつて、其の末路も亦同一である。西洋の文明國民の如きは今や文明病に罹つて居る。麻疹に罹つた子供は大抵生命は取られない。所が此の文明病と云ふ病氣に襲はれた國民の末路は滅亡有るのみである。而も此の滅亡が其の結論である。今や文明國民は文明に憧れて結局死の途を急ぎつゝあるのであつて、實に哀れなものである。之を歴史上の事實に徴しても、古來の文化國と云ふものは大抵一定の年數を経て滅亡して居る。所謂生者必滅であつて、古今の治亂興廢の跡を考へると、短くて二百年、長きも千年を出た國民は無い。彼の古のバビロン、アッシリア、埃及、希臘、羅馬、皆然りである。印度の如きも然りである。支那の如きも、歴代の王朝は大抵二三百年で亡んで居る。文明が若し斯の如きものであるとするならば、文化生活とか文化國とか云ふものを憧がれると云ふことは其の國に取つて餘程考へ物である、と云ふ様なこ



をカーペンターは速べて居るのであります。

### (五) 社會の頹廢的氣分

又今日皆さんの御存知の如く西洋に於て二十世紀の文化の發達と共に社會の頹廢的氣分が段々多いやうに思ふ。昔の如く、朝早く起きて勤儉に努めると云ふことがなく、遊蕩に夜更しをすると云ふ習慣が段々多くなる、華美の風の如きも段々多くなる。酒其の他刺戟的飲料を飲むと云ふことも段々殖える。菓子などにも色々刺戟的のものが多くなる。チョコレート其の他いろいろのものにも、其の中にはウヰスキーだとか其の他刺戟性のもものが這入つて居る。殊に女が之れを好む。活動寫眞が流行する。刺戟が多くなる。随つて食べ物にも刺戟的の食べ物が多くなる。飲料にも其れが多くなる。昔は煙草や酒を用ひるのは男だけに限つて居つたが、段々女もさう云ふものを所謂人類平等の見地から用ひる様になる。と云ふ風でありまして、社會の頹廢的氣分が漸く西洋に於て強く現れて來つゝあるが、今や我が日本の國にも大分入りつゝある。斯の如き事はカーペンターの見地から言へば結局社會の滅亡、人類の滅亡を來すべきものと言ひ得るのであります。

若し世の中と云ふものが、普通に信せられて居る如く、強きものは何時かは衰へ、盛なる者は終には亡ぶと云ふことは避け得べからざる宇宙の大原則であるとするならば、恰度人間が生れたならば必ず死ぬ様に國家も何時かは滅亡するのだから是は人力の如何ともすべからざるもので、世の中が文明になれば文明になるがまゝに捨て置くがよい、頹廢的氣分が多くなれば然うさして置くがよい、結局かの羅馬や希臘のやうに亡びるのは已むを得ないと云ふ様に諦めてしまふならば是亦一つの考へ方でありませう。併し我が日本の如きは所謂天壤と共に窮りなかる可しと云ふ御神勅が昭々乎として我が國民精神の上に輝いて居りまして、吾が國は永久に、他國の領土になることもなく他國の爲に滅ぼされることもないと確信するからには、之と同時に内から此の社會組織が頹廢し、土崩瓦解して滅びるやうなこのない様に、努力奮勵して、質實剛堅の氣風を培養することが、極めて必要な事と思ふのであります。而して其れが如何にすれば出来るか出来ないかと云ふことを研究することは、常に今日生きて居りまするお互の爲のみならず、更に愛すべき吾々子孫の爲だと云ふことにもなるのであらうと思ひます。斯の如き見地から私は此の社會國家を健全に發達さす爲に如何なる事柄が必要であるかと云ふことを併せて今回の機會に於て述べて見たいと思ふのであり



ます。

### (六) 進歩か退歩か

○古い思想をいろ／＼分析解剖して見ると、結局世の中は滅びるものだと云ふやうな諦めを付けて居る學者も随分多いのであります。例を擧げて見ると、支那で云へば彼の老子の説、莊子の説——所謂老莊の哲學ですが、是は世の中は段々悪くなると云ふ説である。人間が懶巧になれば懶巧になるだけ人間が悪くなる。所謂世は澆季だと云ふ。佛教の所謂印度思想であれば末法濁世だと云ふ。昔は人の根性も善く、皆眞面目であつた。物を借りても金を借りても正直に返すが、今日では中々さうは行かない、法律の裏を潜つて段々悪賢くなつた、所謂世も末だと云ふ思想、是は日本印度のみでなく、西洋でも斯かる見地から世の中を觀て居る思想は随分有るのであります。殊に有名なのは、西洋に於ては彼のルーソーであります。彼は一種の自然主義を唱へまして、自然の質朴なる生活を憬がれて、人爲的现代文明を呪ふやうな思想を發表して居りますが、其の思想は支那の老莊の思想と甚だ似た所があります。さうかと思ふと西洋では亦斯う云ふ思想もある。是も西洋だけに限らぬのであります。世の中と云ふ

ものは、そんなに悲觀したものでないと云ふて循環論を唱へる人があります。世の中は廻り持ちで、圓形の様動いて居ると云ふ。伊太利の社會學者のビーコー(Vico)と云ふ人などは此の循環説を唱へて居ります。世の中は結局循環して行く。だから世の中が盛になつたとか衰へたとか云つても、それは一部局觀で結局循環して居ると説くのです。更に別の思想は以上二説とは異り、段々世の中が善くなると云ふ思想です。先づ形式から云へば此の三種類があります。

所で私自身としては一體どれを信じて居るか云ふならば、是は社會學といふ學問の因つて起つて來る所以から實は説かなければ分らぬ譯であります。畢竟するに世の中は段々善くなる、現に善くなりつゝあると云ふことを確信して居るのであります。さうして今後も改良に改良を加へ努力に努力を加へて此の世の中を善くして行かなければならぬ責任をお互が有つて居る。其の爲には社會の病的現象を無くして行かなければならぬ。何が病的現象か。是が是からの研究問題であると私は思ふのであります。

### (七) 社會均衡論

そこで少しく話を元へ戻して述べて見たいのであります。先づ第一に世の中を健



全に發達さすには世の中の各部分々々を同じ様に伸ばして行かなければならぬ。是は間違ひのない大原理であると思ふのであります。之に付て皆さんに一つ面白い學説と云ふか話と云ふか、之を紹介して見やうと思ふのであります。亞米利加にロツス(Ross)と云ふ學者がありました。是は有名な社會學者です。そのロツスが嘗て亞米利加の社會學研究雜誌に發表しました所の社會均衡論とでも申しませうか、世の中の何の部分をも均等に發達させなくてはならぬと云ふ議論を述べて居ります。是は非常に面白い説だと思ひます。學究的の話は姑く省きますが、社會の各部分を均等に發達さすことが社會發達の所以であることは先刻から述べた通りであります。そこで社會の各部分を均等に發達さす爲に避けなくてはならぬ事柄をロツスは五つ擧げて居ります。

#### (八) 老人の支配

●一つは何であるかと申しますと、故人及老人の支配と云ふことです。英語で申せば Rule of the dead and rule of the old. です。——死んだ人と年寄が此の現代社會に餘りに蔓つては困る、斯う云ふのです。死んだ人の跋扈、老人の跋扈を社會改善の爲には避けたい。斯う云ふのです。御存知の如く亞米利加と云ふ所は極めて新社會である。所

謂適材を適處に置くことに付ては他の歐羅巴の舊い國よりは情實のない國であると思つて居りますが、其の國に於て斯の如き議論の出ると云ふのは餘程面白い。日本の維新以後大正に掛けて社會の有様を觀て見ますと、維新以後隨分若い人が社會の舞臺に立つて働いて居つた。所が近代になつて少し日本は發展が止まつたのではないかと思はれる節が色々の點に於て出て來て居る様である、此の爲にはお互に努力して所謂更始一新をやらねばならぬと思ひますが、其の一つとして、若い人が早く働くやうな氣分を社會に造ることが非常に必要な事ではなからうかと思ふのであります。學年短縮論が一時朝野を風靡致しまして中學校令高等學校令などを改正されたのも、三十面提げて大學を出て居る様では青年の元氣が銷磨してしまつて到底働き得ない。やはり西洋の如く二十歳位で大學を出るやうに學年短縮をしなければならぬと云ふやうな議論の出たのも無理からぬ事と思ふ。私共の唯聞いて居ることではありますが、歿くなられた伊藤公爵が兵庫縣知事になられたのは二十七八歳であつたと思ふ。今日はなかなか二十七八で知事になると云ふことは思ひも寄らぬことである。さうして、それでは長く其の人が働けるかと云ふと中々長く働けない。これは國家の人物經濟から言ふと餘程此の點に於ても行詰まつて居る、斯う云ふやうに私は社會學の立場から思つて居



る次第であります。

### (九) 男性中心主義

それは別問題と致しまして、第二の箇條と致しましては、**男性中心** Masculinism. の社會はいけないと云つて居ります。男のみが跋扈する世の中はいけない。是も亦見様に依つては面白いことである。何故ならば亞米利加と云ふ國は女の相當に威張つて居る國である。其の女の威張つて居る國のロツスがこんな事を云ふのでありますから、餘程今の世の中と云ふものは所謂人類平等と云ふ見地から言ふと男が威張つて居る、女が所謂差別待遇を受けて居ると云ふことを看取しなければならぬ。而も是も先刻の話の通り有ゆる部面の有ゆる人を均等に伸ばして均等に値打附けると云ふ點から言へば成程嬾天下も宜しくないと同時にいつも亭主關白主義も論理上宜しくないこと、思はれます。若し婦人問題と言ふやうな内容に入るならば餘程面白い議論もあるのであります。今日は省いて置きますが、彼の有名な社會學者スペンサー (Spencer) の如きは斯う云ふことを言つて居る。世の中には食人族があつて、人を食ふ時代もあつた、或は人身御供の時代もあつた。人間を神様に供へた。斯う云ふ野蠻な風習はあつたけれど

もいづれも一時的であつた、又同時に一般的でなかつた。何處にも有つたと云ふ譯ではない。然るに拘らず婦人の虐待といふことは永続的であつて而も一般的である。即ち世界的に行はれて居る。スペンサーは二十世紀の初に死んだ人でありませんが、婦人虐待と云ふことは今日が頂上で此の度を超ゆれば婦人といふものは自滅あるのみ。婦人は死んでしまふ。婦人が死んでしまふのは則ち人類の滅亡なりと云ふ様なことを述べて居る。又ルツルノー (Letourneau) と云ふ佛蘭西の學者は、人間が弱者を尊重すると言ふことは文明の賜物である、野蠻時代には斯の如き人情の發露はなかつた、何と云つても女は弱者であつた、男よりも弱い。所が世の中の發達が幼稚なれば幼稚なるほど、女の地位は低い。故に婦人の地位如何と云ふことは實に文明の程度を測るバロメーターであると言つて居ります。斯う云ふやうな譯で社會を均等に發達さす爲には男ばかりが威張つて居つてはいけない。こう云ふ考は亞米利加のロツスだけでなく佛蘭西のルツルノー、英國のスペンサーの如き權威ある學者も十九世紀末から随分叫んだ事柄であります。何の爲に私が之を話すかと云ふならば、つまり後に今日の社會運動の事に説き及ばして見たいから一言此の點を申して置くのであります。



## (一〇) 尊僧主義

第三にロツスは社會が均等に發達する爲には一部分を偏重してはいけなさと云ふ論據として次に何を擧げて居るかと云ふと、尊僧主義 (Clericalism) がいけなさと云つて居る。僧侶の跋扈がいけない、宗教家が非常に跋扈してはいけない。是は今日として見れば寧ろ古代よりも宗教の權威が衰へて居るかの如く思はれる時代に於て如何なる點からロツスが斯く論ずるのか一寸判斷に苦むのであります。勿論之を歴史上に觀ますならば歐羅巴の中世とか、或は日本に於ても叡山の山法師が非常に横暴をした。或は、又人々の解釋に依つては意見が違ひますけれども、弓削道鏡の如き、餘りに僧侶を尊び過ぎた爲に其處に弊害のあつたことは歴史上に幾らも現れて居りますが、今日に於て尙之を説く必要は何處から來て居るのか。私は一寸解し兼ねる。否な強て言ふならば二三思ひあたる事柄もあるのであります。今日の話にあまり必要のない事でありませぬ。併し斯う云ふことは確に言ひ得る。つまり有ゆる部面の役割の人も均等に働かなければならぬと云ふことを原則として見れば、宗教家が跋扈することは宜しくないことであると云へるのであります。

## (一一) 軍國主義

第四には彼は軍國主義 (militarism) をいけなしとして居る。ミッタリズムはいけなし。之に付いても丁度前の宗教家をあまり尊び過ぎるのをいけなしと云ふのと同じく、誤解のない爲に一言して置きたいと思ひます。勿論軍國主義と云ふことで悉く國の政、國の掟を定めることは其れはいけないと思ふ。併ながら同時に是は軍國主義を廢めるといふ議論にはならぬと云ふ點を能く注意しなければならませぬ。即ち各部面均等に働くと云ふのでありますから、如何に世の中が進んで如何に實業獎勵の時代になつても、凡そ國としては國防と云ふことを忽せにしてはいかぬ、凡そ人間として宗教心と云ふものが無くなるものでない以上は宗教家も他の人と同様に必要なものであり、尊ばなければならぬものであると同じ様に、軍人に對しても他の職業の人と同様に國家の爲には貴重なる役目を爲す人であると云ふことは間違ない。唯何もかも軍國主義で行くと云ふことは所謂社會の各部面均等の發達と云ふ點から云ふと害の有ること、謂はなければならぬと思ふ。



## (二) 軍國主義と産業主義

何故私が是だけの言を費したかと申しますと、茲に日本のみならず西洋にも一つの謬れる學説が行はれて居る、其れを私は指摘したいが爲に茲に此の言を爲すのであります。謬れる學説とは何かと云ひますと、今婦人問題のときに私が十九世紀の大家として挙げました彼のスペンサーです。スペンサーは社會學の大家でありますが、次の點に於て私はスペンサーの考は間違つて居ると思ふ。スペンサーは十九世紀の末に於て書きました彼れの社會學の書物の中に、將來は軍國主義が衰へて産業主義が盛になると云ふことを斷言して居ります。でありますから二十世紀になりまして所謂軍閥攻撃とかいふ様なことの爲に、もう軍國主義即ちミリタリズムの時代は過去の夢だ。往昔國を建てる時には何うしても武力を以て天下を取つた、所謂馬上天下を取つた、其の馬上天下を取つた者が同時に其の國の國王となつて居る。であるから總ての組織といふものをミリタリズムでやつて來た。併ながら産業革命以後最早さういふ時代は過去の夢であつて、今後は何うしても産業主義で行かなくてはならないと同時に戦争と云ふやうな野蠻なことは止めなければならぬ、所謂四海同胞、萬國平和、是で行かな

くては嘘だといふ思想が非常に近來強くなつた。殊に一方社會主義などの側からも此の意見を助けるので、随分是が強くなつて、スペンサーをして大いに名を成さしめた。何故かと云へば、スペンサーは夙に軍國主義が衰へて産業主義が盛になると云ふことを其の著書の中に書いて居るからスペンサーが其れを豫言したのであると云ふやうにいふ人もあります。然し之は大いに間違つた議論であると私は思ふ。第一スペンサーが何故斯の如きことを云つたかと申しますと、實は英國のスペンサーより以前にヒューム(Hume)と云ふ人がある。ヒュームの議論が矢張り其れであります。ヒュームは哲學者でありますが、軍國主義が倒れて産業主義が之に代はるものであると云ふやうなことを云つて居る。私は軍國主義萬能と云ふことは毫頭唱へない。併ながら私は自分の社會學の見地からして、萬國平和と云ふことは所謂理想としては希望したいことである。けれども丁度前に申した所の、人間の本質を分析解剖した結果宗は衰へるものでない、人間の本質を分析解剖した結果人間には不平不満の念が熄む時がないと云ふのと同じ様に、人間の本質を根本的に造り變へない以上は萬國平和など云ふことは夢だと、思つて居るのであります。又是は事實上に於ても夙に證明されて居る事柄だと私は思ひます。一方に國際聯盟など唱へられて居りながら、英國が、新嘉坡を



どうするとか、ジブラルタルをどうしたとか、色々軍備を整へて居ると云ふやうな事實が充分之を證明して居る。二十世紀には戦争はないと云ふことを十九世紀には盛んに稱へられたにも拘らず、御存知の如く古今未曾有の大戦争が勃發して居る。是は皆人間の本質から來て居る。人間にはそんな本質がある。然らばどんな本質から來て居るか。これは私の所謂社會學說を少しく述べないで議論が徹底しないのでありますが、今日は其れを詳しく述べる時間がありませんから、一寸簡單に今申した點を説明し得る程度に私は述べて見たいと思ふ。これは後の所謂人類意識の發達にも多少關係があるから一寸述べませう。

### (一三) 社會相對性原理

私は斯う思つて居る。世の中とは果してどんなものであるかと云ふ事に付て、社會學者の中には、所謂世の中は協同生活だとか、或は宗教家の立場から、世の中は愛とか慈善とか慈悲とか、或は人間といふものは所謂四海同胞であるとか、或は連帶責任とか、或は同類意識、或は協力などいろ／＼の學說が今まで社會學上出て居ります。といつて亦之と相容れない思想が今まで随分社會學者の說として唱へられて居る。そ

れは何う云ふ說であるかと云ひますと、畢竟するに世の中は戦争である。或は吾々は生活する爲には生活戦争と云ふことをやつて居る、所謂生存競争である。つまり自分の生きる爲の戦争である。子供が學校へ這入らうとするやと直ぐに入學試験と云ふものがある。定員が限られて居るから自分が這入らうといふには他を排除しなければ這入れない。東京などでは此頃は電車が非常に込みあふ。人に譲つて居つたら自分はいつまでも乗れない。そこで人を排除しても自分が乗らうとする。斯う云ふやうな譯で、一方では平和を説き協同を説き協力を説いて居る學者が多いかと思ふと、他方には所謂生存競争、生活闘争と云ふことが説かれて居る。更に國と國の間には人種の競争、民族の競争と云ふことがありまして、今日社會學上申しますと何れの說に従つて宜いのか實に捉まへ處に困るのであります。私は此の社會學の大家達の色々の議論の相容れない點を見て斯う思つて居ります。これは何れも皆事實だと斯う思ふ。事實だと云ふと極めて矛盾する様でありますが、實は其處に矛盾しない原理がある。是は私の所謂社會學說の原理の一つである。一々社會學の話を今日する譯ではありませぬが、其の矛盾する様で而も矛盾しないと云ふ私の考を一寸述べて見たいと思ひます。私は自ら名づけて之を社會の相對性原理と云ふて居る。否な是は社會ばかりではな



い。宇宙の眞理は必ず然うなくてはならぬと思つて居る節があるのであります。何う云ふ點で其の二つが矛盾しないかと云ふと、吾々が社會に生活する上に於て何時も相反する二つの力が働いて、それがバランス(平均)の取れて、始めて安定を得て居ると云ふことは是は宇宙の法則として間違ひのないことである。例へば太陽の周圍を地球が廻つて居る。これは一つには地球と云ふものが太陽の求心力に依つて太陽に引付けられて居る。若し其れだけならば地球は太陽と衝突して焼けてしまふ。所が之と同時に地球は太陽から遠ざからうとする遠心力がある。即ち引きつける力と逃げようとする力と兩方が平均した所で所謂太陽の周圍の軌道を地球が廻轉して居ると云ふことはお互が天文學に於て當然知つて居ることである。丁度一つの毬に糸を附けて廻したと同じである。引く力だけならば毬が手の方へ引付いて來るけれども同時に飛んで行かうとする力がある。飛んで行かうとする力と糸で引張る力と平均するから廻つて行くのです。是が物理の法則で、宇宙萬象何事にも此の二力が働いて居る。この道理をよく玩味すれば世の中はどんなものであるかと云ふことの一つの眞相を捉まへたことになると思ふ。

#### (一四) 結合と分離

此の關係は色々の方面で看取することが出来るが、今其の代表的のものとしてこゝに一つお話しして見ようと私が思ふことは分離と結合との關係である。此の二つの力の關係であります。分離といふのは逃げやうとする力です。結合は引張らうとする力です。これが物理の法則で云へば求心力と遠心力といふ様な關係に働いて居つて此の社會と云ふものが出來て居る。だから斯うして生活して居るお互の間にも此の求心力と遠心力がある、即ち分離と結合がいつも働いて居る。斯う云ふ様に私は觀たいのであります。社會學者の中に、社會は協同生活だ、社會は持寄りだ、社會は相互扶助だ、四海同胞だと説き或は宗教家が慈悲だ博愛だと云ふやうに説くのは此の結合の方を説いて居るのである。分離の方を説いて居るのではない。何故かと云ふと、人間は動もすれば相離れんとするものである、相敵討せんとするものである、相喧嘩せんとするものであるから、此の病を治す爲に或は慈悲であるとか、或は愛であるとか、或は社會は相互扶助であるとか或は連帶責任であるとか、或は社會奉仕とか、色々の言葉を使つて人と人とを結合さすことを説いて居る。併ながら世の中には結合の力のみ働い



て居るのでなく、分離の力が亦非常に働いて居ると云ふことが分る。分離とは何かと云ふと、一つの場處を同時に二つの物が占められぬと同じく、人間と云ふものは皆自分と云ふことを考へて居つて、自己の生存、自己の保存と云ふ事の爲に動もすれば他を犠牲にせんとする。例へば人間が魚を食つたり鳥を食つたり獸の肉を食つたりして居るが、鳥や獸も亦他の動物を食つて居る。其の動物が亦他のものを食つて居ると云ふやうな風で、さう云ふ場面が世の中にある。之が世の中の優勝劣敗、弱肉強食の事實である。之れと同様に社會上にも色々こんがらかつて起つてくる各種の問題、各種の不平或は各種の争鬭、其等は畢竟するに結合と分離のこんがらかつた關係から編み出されるものと私は思つて居る。如何なる場合にも是が伴ふ。

### (一五) 男性と女性

例へていふと男女の關係であります。男と女と云ふものほど關係の親密なものはない。其の爲に結合して出來たものが所謂夫婦である。或は結婚である。或は戀愛である。これは結合の形に於ての最も強いもの、最も猛烈なものである。生命までも自分の愛人の爲めには惜まぬ、或は家庭の夫婦に致しましても、一生涯苦樂を共にしやう

とする。是程強い結合はない。所が今日西洋各國に於て起つて居る婦人問題と云ふものは一體如何なる性質のものであるかと云ふと、女子がその同性のものを結合して、異性たる男子に對しての戦争である。例へば同じ勞働に對しては女子にも男子と同様に同一勞銀を拂へとか、或は政治と云ふものが其の國に生存して居る人々の利害休戚に關係する事である以上は、而して其れを其の休戚に關する人々に相談すると云ふことが今日の政治の最も進歩したる様式である。以上には女子が男子と殆ど同數若くは國に依つては全體の半數以上を占めて居るやうな現代に於ては、政治の事柄も女子にも相談すべきであること云ふ如き意味からして、婦人參政權の獲得運動の如き、何れも一方の男子を敵としての運動であります。即ち女性と云ふものが男性に對して結婚、戀愛と云ふやうな非常に強い結合を一方に現すかと思ふと、他方にはさう云ふ異性に對する敵對行動を執ると云ふやうな事も起つて居る。否更に之を他の半面から見ると云ふならば、一體戀愛其もの即ち或る一人の女が或る一人の男に戀をする事柄は、  
|| 其一人の男に對しては非常な結合であるけれども、同時に其の戀人以外の社會全體の男子に對しては、總て是れ肘鐵砲である。即ち一方に非常に強く結合すると云ふことは他方に肘鐵砲を喰はせると云ふ現象である。



(一六) 政黨の社會學的研究

又今日政黨派の争も全く同一現象である。政黨派には色々主義主張もありませうが、私共が社會學上から申しますると、畢竟するに人間の團結と云ふものは次の如き心理状態から働いて出來て居る。即ち人間は自分一人の力で敵を倒すことが出來ないと自覺したときに、即ち敵が強くて自己の微弱なることを覺るといふと茲に他人の力を借り協力して敵に當る。社會學の方から云へば社會と云ふもの成り立ちも即ち其れである。例へば野蠻時代に於きまして、或處に住んで居ると狼がやつて來る。自分一人では狼を防げぬから協力して狼を防いだ。或は河が流れて居る、洪水を防ぐ爲に堤防を築かなければならぬが自分の部落だけ堤防を築いても駄目だ。そこで多數部落が連合して堤防を築いて洪水といふ敵に當る。此の協力、連合、結合と云ふことは、何時も敵があつて出來る。であるから自分一人では敵に當れないときに同志結合して敵に當る。斯う云ふ事から出來たのが政黨派結合の理由である。國家も斯の如くにして出來たものである。社會發達の歴史から云へば、國家以前に先づ部落と云ふものが出來て、部落が發達して町となり、町が發達して市を成し、段々大きくなつて

國家を成したと、斯う云ふのでありますが、即ち村も國家も、或は市も、或は政黨も、總て社會學者は所謂共同の敵を防ぐ爲に利害を一にする者の結合體と斯う觀るのであります。既に然りとすれば、一方では萬國平和の運動が盛であると同時に他方では武備を用意すると云ふことは是は已むを得ない人間性の發露であると思つて居る。これは國と國との場合に於てのみならず個人の社會生活に於ても亦同様である。所謂無抵抗主義——普通の社會人として、如何なる事があつても腹を立てない、無抵抗主義で行かう、敵を造らないで行かうとする主義——は或る程度までは甚だ結構であるが、それを極端にやつて居ると、彼はおとなしいと云ふ。おとなしいと云ふと非常に結構であるが、もう少し行くと彼はお人善いだ——彼れは馬鹿だと云ふことになつてしまふ。さりとて無暗に衝突して居つては是れ亦困る。どうも彼奴は調和性を缺いて居ると云ふやうな譯でありまして、どうしても社會人としては、どつちかの一方に偏つてはいけない。やはり均等な發達をして、一方には自分の實力を備へて、而して漫に人と喧嘩しない。喧嘩しないから實力は要らぬと云ふわけには行かぬ。此の見地から私は今日政黨派の争があるのと同様に、昔は源平藤橘の争があつたと云ふ様に、一ツの國の内にも色々黨派の出來るのは已むを得ないと同時に、國際間に於て戦争の起る



のも是は國がある以上は豫想しなければならぬことである。軍國主義はいけなさとロツスが述べて居ることは全然軍國主義を撤廢しようと思ふ事ではないと思ふことを私は後の話の爲に附け加へて置きたいと思ひます。

### (一七) 商工本位主義

第五にロツスはコンマーシャルイズム (commercialism) 即ち商工本位主義はいかぬと云ふので、商工本位のみで國が立つものではない。然うすれば今度は亦農民黨と云ふものが起つて來なければならぬ。農民本位でもいけない如く商工本位のみでもいけない。

### (一八) 中庸主義

要するにロツスは斯くの如く社會の均等なる發達を妨げるものとして五つの事項を擧げて居りますが、これは五つでも六つでも私は宜いと思ふ。要するに社會の健全なる發達の爲には各部が均等な發達をしなければならぬと云ふことを説いたものと、私は觀たいのであります。支那の古い書物で彼の「中庸」の中に、「致中和。天地位焉。」

萬物育焉。』とあつて、さうして其の註の所に、「程子曰、不偏之謂中。不易之謂庸。中者天下之正道。庸者天下之定理。」と云つてありますが、結局社會の健全なる發達と云ふことは何うしても中庸で行かなければいかぬと思ふ。此の所謂社會の各部の健全なる發達を妨げるものがあれば何處迄も之を排斥して行かなければならぬ。個人の場合には所謂生者必滅で、死んでしまへば終りでありませうが、社會の場合には全く個人と同じと云ふ譯には行かない。殊に日本の國家の如きは是は天壤無窮に傳へて行くべき義務を吾々は祖先から負ふて居る。其の爲に國家の老衰を防ぐ爲に如何なる事が必要であるかと云ふことを私は少しく述べて見たいと思ふのであります。

### (一九) 社交性

國家の老衰を防ぐために爲すべき事は澤山ありますが、私は其の第一と致しまして社交性——吾々の社會生活を爲す社交性に反する事柄を除いて行かなければならぬと思ふ。社交性と云ふことに就いては、丁度前のプラトリーの議論と同様で、随分古い根據がありますが、プラトリーは、世の中と云ふものは人間に喩ふべきものであると、斯う云ふことを述べて居ります。それと同じく希臘時代の有名なアリストートル (Aristotle)



と云ふ人は、是は言葉は色々になつて居りますけれども、つまり人は社交的動物だといふことを云つて居ります。アリストートルの云ふことは實はポリチカルと云ふことを云つたので、人は政治的動物だといふことを云つたのだと申す人がありますけれども、あの當時のポリチックと云ふ言葉は今日の言葉で云へば社會と譯すことが適當であるといふことになつて居ります。人は社會的動物であるといふことは斯う云ふことになる。我々人間は一人では何うしても此の世に生活することは出来ない。他人の協力に頼らなければならぬ。其處が私の謂ふ相對的である。一方に於て人を排斥するかと思ふと、一人では此の世の中は寂しくつて生活が出来ぬものでない。寂しくつてではない。どうしても一人では生活の出来ない理由がある。

## (二〇) 協調主義

西洋學者の議論を引用するまでもなく、東洋の學問の中にも夙に此の原理は述べてある。アリストートルなどは随分西洋でも古いのでありますが、支那に於てはそれよりも更に古い四書五經の中にも随分面白いことが云つてある。今孟子の一節を試みに引用して見ませう。

有<sup>ニ</sup>大人之事<sup>一</sup>。有<sup>ニ</sup>小人之事<sup>一</sup>。且一人之身。而百工之所<sup>レ</sup>爲<sup>ハ</sup>備<sup>ハ</sup>。如<sup>モ</sup>必<sup>シ</sup>自<sup>ラ</sup>爲<sup>シ</sup>而後<sup>レ</sup>用<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、  
是<sup>レ</sup>率<sup>テ</sup>天下<sup>ニ</sup>而路<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>。故<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。或<sup>ハ</sup>勞<sup>シ</sup>心<sup>ヲ</sup>。或<sup>ハ</sup>勞<sup>ス</sup>力<sup>ヲ</sup>。勞<sup>シ</sup>心者<sup>ハ</sup>治<sup>ム</sup>人<sup>ヲ</sup>。勞<sup>ス</sup>力者<sup>ハ</sup>治<sup>ム</sup>於<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>。治<sup>ム</sup>於<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>食<sup>ム</sup>人<sup>ノ</sup>。治<sup>ム</sup>人<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>食<sup>ム</sup>於<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>。天下<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>通<sup>ス</sup>義<sup>也</sup>。

此の世の中に於て人々が總て同じ職業を爲すと云ふことは出来るものでない。爰に云ふ大人とは政治家などを云ふので、小人と云ふのは何も君子小人の小人ではない、官に就かない人と云ふことです。官に就く人もあれば官に就かないで實業なり勞働に従事する人もあるが、而も人間の一人の身といふものは必ず百工の爲す所の事が備はるのであつて、色々の人の手を借りたものを吾々の身に著けて居る。例へば洋服を着て居る。これは洋服屋で買ふただけではない。此の切地を誰が造つて呉れたかと云ふことを考へなければならぬ。眼鏡を懸ける。これは眼鏡屋が造つただけではない。此の金屬を誰が山から掘つて來て呉れたか、又硝子といふものを誰が造つて呉れたかと云ふことを考へなければならぬ。斯う云ふやうに、有ゆる方面の人の力を借りてお互の生活が今日出來て居るのである。若しも例の獨立獨行主義からして、人の手は一切借らない、自分獨りで總てやると云ふやうな考を有つならば、先づ自分で米を作らなければならぬ。米だけではない。耕すときの鋤鍬からして自分で造らなければならぬ。



魚を食はうと云つても自ら海へ行つて採らなければならぬ。肉を食はうと云つても自ら山へ行つて獵をしなければならぬ。斯の如き事が一人の身で出来るかと云ふと是は出来ることでない云ふのが此の趣意であります。是率<sup>レ</sup>天下<sup>ヲ</sup>而路也<sup>ト</sup>云ふのは、天下中に路をつけなければならぬ。さう云ふ状態であつては人間は奔命に疲れてしまふ。だから人間が社會生活を爲し得るのはお互の助け合である。いろ／＼方面の異つた所で働く爲にお互に暮らせるのである。然らばどちらの仕事が偉いかと云ふと、之に付ては次に云つて居る。故に曰く、或は心を勞し或は力を勞すと。或人は心を勞し或人は力を勞する。心を勞する人は人を治めて居る。政治家の如きは其れである。人を治めて居るけれども同時に人に養はれて居る。自ら米を作ることとは出来ない、自ら魚や獸を獲つて來ることは出来ない。さう云ふ事の方面で働いて居る人即ち力を勞する人に依つて養はれて居る。だから勞働者は一方は人に治められて居る代りに他方では人を養つて居る。是が天下の通義である。斯う云ふのです。今日いろ／＼西洋の學説が紹介されて、所謂勞働は神聖であるとか職業は神聖であるとか或は社會は連帶であるとか云ふ經濟學説は色々出て居りますけれども、此の三千年乃至四千年前の孟子の述べた所の説と云ふものが結局其れと少しも異ならない。唯其の説き方が西洋風でなく、

言ひ廻しが東洋流であるだけの相違である。是は何かと云ふと、人間は社交的動物である、他と助け合はなければ共倒れになると云ふ眞理を云ひ現したものである。若し世界中其れが出来らば或る程度の軍備は要らない事になる。一揆が起つたとか何とか云ふ時の爲には備へなければならぬが、或る程度までの軍備は要らぬことになる。而かも今度の東京地方の大震災の時に當つて戒嚴令を布いたから漸く治安が保てたけれども、若し全くの軍備撤廢であつたら斯の如き場合に、所謂人間の本能性の爆發した時には治め様がない。此の點から見ても軍備は必要であるが、又所謂社交的動物として相互に助け合ふことも必要である。同じ人種であり、同じく宗教があり、而も同じ血族から出て同じ土地に住んで居ると云ふ此の國民ほど相近いものはない。だが、世の中と云ふものには種々のコンガラガリがある。一軒の家といふものを組織して居つても所謂夫婦喧嘩もある、親子喧嘩も絶無とは云へない。親類と云つても、親類であるが爲に却て彼處は威張つて居るとか何とか云つて色々の問題が起る。お嫁さんが這入つて來てから兄弟の仲が悪いと云ふことも世間には有り勝ちである。併し大體として言ふならば今申す様なわけで、世の中は相持ちで、お互に助け合つて居る。同時に亦一方から云へば自分を助けて呉れる。であるから此の社交性に反したやうな行動



は撲滅して行かないと所謂國家の老衰を防げない。即ち天壤と共に無窮と云ふわけに行かぬ。

## (二) 社會平衡の六箇條

此の社會の各部均等と云ふ點から云ふと、出来るだけ政府などが努力すべき點は先づ(一)富の平均である。彼の共産主義が説く様なことに依つて富の平均は出来るものではない。是は私は明日大いに其の根據を述べたいと思つて居ります。併ながら富の不平等と云ふ事からは貧乏と云ふものが出来る。そこで窮民と云ふものが出来来る。此に於て所謂社會の救濟事業、或は孤兒院とか或は養老院とか色々な事業が出来来る。或は中産階級の問題が出来来る。或は勞働問題、或は食料問題、農村問題、其他色々な問題が起つて來ますが、畢竟するに富の分配が出来得るだけ均等になる様にしなければならぬのであります。今日税金を取立てる上に於て所得税を初め所謂累進課税になつて居りますが、あれなどは富を分配する爲である。或は相続税をウンと取るなんと云ふことも所謂社會主義的政策の結果でありまして、矢張り富を分配する爲である。其次には(二)知の均等を保つこと。所謂有識階級とか無識階級などと云ふ者の無から

んことが理想でなくてはならぬ。それが爲に何うしても實行しなければならぬことは教育の機會均等である。金が有る爲に教育が受けられ、金がない爲に教育が受けられないと云ふやうなことの無いやうにしなければならぬ。

次には(三)権力の不平等があつてはいけない。是は國內に於ては例の選舉權の問題の如きであります。普選を實行しやうと云ふ如きは全く此の點に於ての不均衡を取り去らうとするものと謂へる。所が是も本當を言ふならば所謂(四)性の別も無くしなければ眞の普選とは謂へない。前のロツスの言葉にありました如く、男だけが普選になつても本當の普選ではない。日本の人口を假に六千萬と致しますならば男は三千萬程ある。さうすると其れに對しての普選と云ふことになる。然らば今直に之を日本に實行するか。これは政治問題でありまして別に議論を要するものと思ふ。兎に角性の不平等、不均衡と云ふことはいけない。男なるが故に威張る。女なるが故に壓へ付けられなければならぬと云ふやうな事があつてはいけない。

(五)徳の問題——道德と云ふものは是れは誰しも同じ様に行はなければいかぬ。政治家である教育家であるが故に道德を行はなければならぬ、勞働者である、百姓であるから道德は同じ程度に行はなくても宜いと、さう云ふものではない。一方に於て教育の



均等、權力の機會均等、富の分配の平等と云ふことを理想とする以上は道徳に對しても同様に行はなければならぬ。

最後には(六)年齢であります。これが前のロツスの云ふた點であります。まだ未成年である或はまだ一人前に發達して居ないと云ふ子供は是れは別であるけれども、苟も兵役にも従事し納税もするといふ一人前の人間である以上には、あの青二才がなごど云ふて若い者を老人が下に視るやうなことも、現代の所謂社會の人が機會均等を得ぬと云ふことになつて来る。であるから社會の健全な發達を期する爲には、自分に都合の好い事柄だけを捉へて居つてはいかぬ。總て同じ様に公平に均等に發達するやうに希ひ、而して此の團體たる國家の無窮の發達を希はなければならぬ。曩のカーペンターの云つたやうな文明病に罹らない様にすべての人が互に助け合つて社會の健全なる發達に盡力しなければならぬ。

### (三) 人種差別觀念

社交性に反する事柄を取去らなければならぬと云ふことは私が今回の講習に於て最も力を入れて述べて見たい點でありますから、是は明日根本的に私は述べたいと思

ひます。私が人間意識の發達と題したのも實は明日述べんとする私の話の中心を擱んで名を附けたのでありまして、今日は唯其の豫備として聊か所見を述べるのであります。であるから何處までも今日は豫備的の事柄を述べるに止めて置きますが、社會發達の歴史を顧みると、所謂原始時代といふものは人を見るのに餘程差別的に見たものゝ様である。嘗て支那人は、東夷西戎南蠻北狄などと云つて、總て是れ夷狄野蠻の國と云ふが如て他の國を見れば東夷西戎南蠻北狄などと云つて、總て是れ夷狄野蠻の國と云ふが如きは、これは何も支那人だけではない。過去の世界の歴史を調べて見ますと何處の國でも大體然うである。でありますから日本人に取つて見れば日本が一番善い國である、日本が一番偉い國である。日本の人種が一番よい人種であると云ふことになつて居る。そこであの眼球の變つた毛色の變つた西洋人を見ると餘り好い心地はしなかつた。況や之と結婚するに於ておやだ。所が西洋との交際が段々頻繁になるに隨つて、今日では相當有識者が或は佛蘭西人を妻とし或は英國人を妻とし、亞米利加人を妻とするといふ様に追々なつて來た。併も是とても昔に於ては行はれた事ではない。

一體此の根據は何處に在るか。是は國內的に云ふならば彼の印度に於ける四姓の別などに最も明瞭に現れて居る。之を國際的に云ふならば所謂人種感情として現れて居



る。

### (二三) 第一回萬國人種會議

私が千九百十一年(明治四十四年)に海外留學の官命を拜した際、倫敦大學で第一回萬國人種會議が開かれました。第二回が千九百十四年に巴里で開かれる筈でありましたが戦争の勃發した爲に延びてしまつた。其の第一回の萬國人種會議の爲に、其の主催者からして日本へも賛同を申込んで來た。衆議院へも申込んで來、政府へも申込んで來た。政府からは其の會議に參列せよといふ命令を私が受けまして出たのであります。議會からも二人の人が出ました。さうして愈々倫敦で萬國人種會議が開かれた。皆各自自分の國の事柄に付て演説をしました。私も一寸眞似事の様な演説をやつたのであります。さう云ふ事の運動は一體誰が發企であつたかと云ふと、是は亞米利加に於て熱心に首唱する人があつたのです。一體戦争などと云ふ事の起るのは人種相互の間の無理解から起る、同情のないことから起る。各國の人種が互に手を握つて懇談して居つたら戦争など云ふ事は起るものでないと云ふ考から計畫されたのである。が、實を言ふと是は亞米利加内に於ける人種の差別撤廢から此の運動が起つて來て居つたの

です。紐育の大學で教員をして居る人に亞米利加土人の血統を引いて居る人がありまして、この人などは非常な熱心を以て首唱して居りました。又一方猶太人の血統の人が各國に居りますから是が亦非常な力を出して援助を致して居りました。印度人も來り、露西亞人も來り、支那人、波斯人、埃及人なども集りていよいよ會議が開かれた。さうして一緒に食事をする、一緒に寫眞も撮ると云ふ様なことであつた。其の時私は日本人であるが爲めにベルシャ人、埃及人、印度人などの方面の人々に非常に歓迎された。何故かと云ふと、日本人が歐羅巴人、亞米利加人と人種が異つて居るに拘らず、露西亞と戦争をして勝つたと云ふ様な所から、所謂有色人種の爲に非常に氣を吐いて呉れたと云ふ様なわけで、其の氣持が應て日本を代表して行つた私を歡待して呉れた譯であつた。所がいよいよ本會議を開かれる前に委員會が開かれた。其の委員會の席で問題が起りました。ソレは今回の會議の目的は各國の人種が互に親交融和を圖る爲の會だと云ふことを宣言書の初に書くに就て相談が始まつた。その原案に英語で Black and white (黒及び白)と云ふことが趣意書に書いてあつた。つまり歐羅巴人は白色人種、其他の者は有色人種である、此の有色人種と白色人種と共に手を携へるといふ意味を書く爲に Black and white と書いたのであつた。これが委員會の席で非常な問題と



なつて、此の會議は人種の差別撤廢を促すための會議である、然るに其の趣意書にブラック、エンド、ホワイトと云ふ如き色といふ文字を使ふのは何事か。此の色といふ文字が單に顔の色が白いか顔の色が黒いか云ふことを表はすのならば問題はないけれども、黒といふ色の中には、随つて教育も低い生活程度も低いといふ様な侮蔑の意味も含んで居る、斯う云ふ文字を使ふのは怪しからんと云ふので盛に議論された。之が主として黒色人種の人々から猛烈に論議されて、遂に大多數を以て其の文字を撤廢することにして、結局 East and west 即ち「東と西」と云ふことにしてしまつた。所がある人がそれならば南と北は何うするかなどと戲談半分に云つて居つたが、それは東西と云へば南北も自然含んで居るのだと云ふ事になつて結局草案がまごまつたことであつた。

## (二四) 人種感情

之れは明治四十四年夏の私の經驗でありまして、一體是等の時に漂ふて居る空気を私は非常に味はつて來たのであるが、それは一體何から來るのかと云ふと 結局感情である。理窟ではない、感情であると思ふ。其の後三ヶ年の留學を了へて私が歸朝の

途亞米利加を巡つて見ました。時は大正三年であるが、所謂排日運動と云ふものが當時も亞米利加では非常に盛であつた。是は亦國際間に於ける反社交性であつて、人種感情の非常に猛烈なものであります。私は日本に居る時分によく聞いて居つた。日本人は勞銀が安い、亞米利加人は勞銀が高い、アメリカ人は日本人と競争しては到底勝てぬと云ふ様な所からして日本人を排斥する、或は日本人は愛國心が強くして金を本國へ送るが故に排斥されると云ふ様なわけで、即ち經濟的とか國家的と云ふやうな立場から日本人が排斥されると云ふ風に聞いて居りました。所が行つて見ると大に違ふ。若し國家的とか經濟的とか、即ち本國へ金を送るとか或は勞銀が安いとか云ふ様なことの爲に排斥するならば何故伊太利人も排斥されないか。伊太利人も勞銀は安い、又伊太利人が本國へ送る金は非常な額である。さう云ふ點から考へると、畢竟するに理窟ではない。亞米利加で日本人が排斥されるのは理窟ではない。何であるかと云ふとソレは感情である。私は社會生活に於て感情と云ふことが非常に重大なる意義を有つて居ると云ふことを確信するのであります。そこで明日は感情論を少し深く説いて見たいと思つて居ります。

尙一言附け加へて置きたいことは、社會を完全に發達さす爲にはもう一つの條件が



あります。それは何かと云ふと、一番初に一寸申しました社會の頹廢的氣分を除去する事である。如何なるものが社會の頹廢的氣分であるか。これは今日實は述べる積りであつたのですが、時間も十二時を過ぎましたから、明日若し時間がありましたならば此の社會の頹廢的氣分をも分朴解剖致して論じて見たいと思つて居ります。今日は是で終ります。

## 下 篇

### (一) 人の本質

私は昨日此の世の中即ち社會現象が何事に依らず總て人の本質、お互の人間の本質から吟味しなくてはならない。如何なる社會現象も皆人間の本質が生み出したものであると云ふ事を話したのであります。

夫れで今日は人の本質と云ふことに就いて少しく話してみたいと思ふ。人の本質と云ふものはどんなものであるかと云ふことに就いては、色々な人が、古來色々に述べて居るけれども、一々そう云ふことに觸れずに直接に私の考へを述べて見たいと思ふ

のであります。

今迄人の本質に關して全く相反する思想が二ツある様に思ふ、一ツは人間も亦動物であること云ふ考への思想と、夫れから他の一ツは人間と云ふものは動物と違ふ否な寧ろ進んで申しますれば神となり、佛となり得る様な靈的なものであること云ふ思想と、此の二ツの思想が東洋に於いても、西洋に於ても古くから今日に至るまで色々考へられて居つた。

如何なる思想、如何なる言説でも大抵此の二ツの何れかに收めることが出来ると思ふ。恰度此の二ツの思想を代表さすに適當な言葉が支那に於て古來あります。夫れは『人者裸蟲之長』といふ句と『人者萬物之靈』といふ句とである。即ち一ツは人は裸蟲の長、と云ふ言葉で他は、人は萬物の靈と云ふ言葉であります。此れは以前からある言葉で、随分古い言葉である。人は萬物の靈と云ふことは支那の文献、『書經』の中に此れが説かれて居つたと思ふ。裸蟲の長に至りましても、いつから申しましたか随分古いことに違ひないのであります。壯子かなんか、あゝ云ふものにありはしないかと思ふのであります。未だ根據はよう突き止めないのであります。

而し之はどう云ふ意味かと申しますると一方は御存じの如く日本でも古來申します



所で人は萬物の靈長である、普通の動物と違ふと云ふことですが、一方では人間と云ふものはそんなに偉いものではない。多夥が裸蟲はだかむしの隊長と云ふので、お互に着物を着て居りますけれども此の着物を持つて生れたものでなく、後から着けたもので、人間の軀を裸體で寝かして見ると結局細長いマア蟲も同様で形の上では他動物とそんなに違つたものでない。個體の發達は種族の發達を繰り返すともいふ如く、胎兒が人間らしくなるまでには、他動物と區別つかない様な時もある。結局人も亦動物である。處が通俗的な考へでありますが普通の獸物けものの様に長い毛が軀中に生へて居ない、或は鳥の様に鳥毛とりげが生へないから裸蟲はだかむしの一番偉いもの、と云ふ事が『裸蟲之長』と斯う云ふたものと私は思ふ。つまり一方は肉體の上から、或は肉慾の上から人間を見たもの、後の方は精神の側から人間を見たもの、斯う云ふ様に私は解釋したのであります。

西洋の進化論……今日總ての學問の根據となりました彼のダーヴィン。ハックスレー一などの唱へた生物進化論上よりみれば、前者は此の進化論の立場に立つたものであると思ふ、何故かならば、我々が非常に尊貴だと思つて居る人間を棚から卸して人間は下等動物の進化したものに過ぎないと見る。其の進化の跡を尋ねて見ると動物とも着かず植物とも着かない様な下等生物が發達して鳥となり、獸となり、更に發達進化

して人間となると云ふ様に此のお互に神聖なるべき人類をば天の上から地上に投げ卸した、と云ふ様な見地にあるものが此の進化論の立場であると思ふ。之に反しまして宗教の立場は、此の汚穢ひきい人間を、或は神の子であると思ふ、或は總て佛性を備へて居る、凡夫も悟れば佛になれる、神になれる、と云ふ様に見えるのであつて、人間をば禽獸を遙かに超越した天上に持つて行つたものである。そこで此の二ツが近世になりまして非常に喧嘩をして居る、一方此の進化論の立場に立つ人は、サイエンスの側から、宗教は迷信で一種の誇大妄想だと説く、そうすると又一方宗教家の側では人間は單に此の物質的の生活のみに満足し得るものではない。彼の進化論者は縮小妄想にかゝつたものであると云ふのであります。

## (二) 動物性と人間性

そこでお互に是非注意しなければならぬ一つの重大な點が、茲に横たわつて居る、夫れは今日の社會問題、今日の凡ゆる階級問題を取扱ふ上に於て先づ決めて置かなければならぬ根本の問題が此の論争の間に横たわつて居ると云ふことを茲に指摘して置きたいのであります。



夫は何かご申しますると此の『裸蟲之長』……英語で申しますと、アニマリテイ、直譯致しまして動物性、……即ち動物の動物たる所以……先刻申しました、『人者裸蟲之長』であります。反對に『人者萬物之靈』之は何を掴まへて居るかご申しますと、人間のヒューマニテイ、……私は之を人間性ご譯したいと思ひます。普通には人道ごか云ふ様に譯して居ります、つまりヒューマンと云ふことは人を云ふ、ヒューマニテイは即ち人の人たる所以、……人間性であります。

然らばお互に人間と云ふものはどんなものかと申しますと、昨日説いた分離ご、結合です。私は世の中をそう見たいのであります、總て相對的に世の中を見たいのであります。私に人間と云ふものは實は動物性、……人間性、……この兩方を備へたものが本當の人間であります、だから此の兩者の争ひは抑もの間違ひで、進化論の云ふ所も正しい、併し又一方に『人者萬物之靈』即ち精神的靈的活動であることも正しい、斯う云ふ様に私は見たいのであります。之に關しての詳細なる説明は今日は致しませんが、私が今回の講演に當り必要と思ふことだけを之から述べて見たいと思ひます。

### (三) 動物性(アニマリチー)(其の一、食ふ問題)

所謂動物性とは何であるか、之はいろいろありますけれども、要するに孔子の云つた彼の、『色食は性なり』と云ふ言葉に盡されて居る。『色食は性なり』。つまり色と云ふのは云ふまでもなく性慾であります。食と云ふのは云ふまでもなく食ふ問題であります。

人間はどうしたつて食はなければならぬ。其の爲めに働らかなければならぬ。假令へばロシアに過激主義の起るや、レーニンは『働かざるものは食ふべからず』と申しました。此のレーニンの思想は随分危険なものがあるけれども『働かざるものは食ふべからず』と云ふことは之を廣く解釋すれば至極尤もなことで、歐洲人は勿論、この世の中に居るものは誰しも働らいて社會共存の義務を盡さなければならぬ。夫れをしないものは食ふべからず、と云ふことは從來の座食の徒に對して非常な痛棒であります。同時に眞理を含んで居ると私は思ふのであります。

又近來、經濟問題、勞働問題を論議する者が生存權と云ふことを八釜しく云ふ。人間が此の世に生れて居る以上食ふ權利があり、生きる權利があると申すのです。働らないで食へない者はそれは自業自得であるけれども、働らいても尙食へない、眞面目に働いて居りつゝも尙食へないと云ふ人があるならば、此れは社會組織が悪いので



あるから、斯の如き社會組織は代へなければならん、と云ふ様なことがアメリカ其の他の國に於きまして唱へられて居りますが、生存權と云ふ様なことも恰度レーニンの『働かざるものは食ふべからず』と云ふことも一應眞理のある尤もなことであると云ふべきであらうと思ひます。

現にアメリカでは養老年金等と云ふことが唱へられて居ります。養老年金と云ふのは何であるかと云ふと、譬へば茲に、車夫なら車夫があつて若い時から眞面目に働いて居る。従つて収入を得て食つて居つたが、其の金は不幸にして妻を養ひ小兒を育てることに費やして貯蓄が充分に出来なかつた。否幾分貯蓄もあつたけれども之が偶々病氣をしたと云ふので皆費やしてしまつた。或は老年になつて昔の様に働けなくなつた、今迄は決して放蕩をやつた譯でなく、怠けたと云ふ譯でもない、若い間は働らいたが、今や老年の爲めに體力が消耗して働けなくなつた。働らかうとしても老人のヨボくには乗り人がない。若いものは、よく走るから乗り人が多いが老人には乗り人がないから、従つて収入もない。處が一定の年限官吏を勤めると恩給と云ふ制度がある。此の車夫は社會の爲めに俸を挽いた、夫れは自分の金儲けの爲めに俸を挽いて居つたのではあるが、然らば官吏も自分の妻子を養ふ爲めに事務を執つて月給を貰

つて居るのである。其處に何等の差別はない。(働いて妻子を養ふ點に於て)然るに斯う云ふ勞働者に對しては多年働いた結果今や老年の爲めに充分働けないと云ふのにとこからも之を救済し保護すると云ふことがないならば、之は其の社會組織が悪い。社會の人々が働らくと云ふことはお互ひ様のことであつて偶々老年の故を以て食へないと云ふことは社會組織が悪いので、そう云ふ人には、社會は宜しく養老年金と云ふ様なものを出すべきであると云ふ様な思想の如きも何等かの方法で之を調節致しますならば、社會政策として實地に取り入れるに於て大に同情すべき點がある様に思はるのであります。

#### (四) 動物性(アニマリチー)(其の二、性慾問題)

一方では斯う云ふ様に食ふ問題が今日八釜しき問題となつて居るかと思ひますと、他方では此の性慾問題と云ふことが近世の問題になつて居る。従來は此の性慾問題と云ふものは餘り人々が口に載せて麗々しく論議しなかつたのであります。寧ろ之は文學とか何かの上にくそ美化されまして戀愛……戀等と云ふ問題として表はれて居りますけれども、今日のやうに露骨に論議されなかつた。然るに男女の性慾問題は近世に



なつて社會の表面に論議さるゝ問題でありまして、之も近世思想の産物の一たるに違ひないのであります。今日の社會主義、今日の所謂危險思想等と云はれるものが稍もすると此の點に就いて誤つた考へを持つて居ると私は思ふのであります、それは何故であるかと申しますと、之等の社會主義者若くは、社會主義的經濟學者が所謂自由と云ふことは之を取り詰めて申しますと、一は政治上の自由、一は經濟上の自由、そして第三には男女關係の自由……即ち此の性慾上の自由を唱へるのであります。

政治上の自由を唱へますと、其の極端は無政府主義に陥るのであります。經濟上の自由を唱へるものは、窮極共產主義に陥り、性慾問題の自由を唱へるものは其の極端の結果は、或は男女關係の無差別自由、或は意味は同じであります、婦人國有、或は女性共有と云ふ様な思想となつて顯はれて來るのであります。

之等の論者の云ふ所に依りますと、何故に政治上の自由が極端に造れば無政府主義になるかと云ふと、政府と云ふものがあつての上の自由、政府の下に許さるゝ自由は眞の自由でない、何故かならば絶對的自由と云ふものには強者と弱者との關係があつてはいけない。即ち政府と云ふ治者と人民といふ被治者と云ふ關係を認むるのは、眞の自由でないと云ふのです。

又資本家と云ふものを認めて其の下に置かれる經濟上の自由と云ふものは眞の自由でない。眞の自由は共產主義でなければならぬ。即ち斯の如く極端に論じますと云ふと人間の慾望のうちで一番強い慾望は何であるかと云ふと、此の食ふ問題、權力の問題に優つても衰らないのは性慾問題であります。而して之を男子側から云ふならば或るものは非常な美人を妻にして居る。又或るものは醜婦を妻にして居るが、矢張り美人の方は誰しも好む、斯う云ふ不公平な社會組織は所謂眞の自由な社會でない。と云ふ様な處から此の男女關係を最も自由にするに云ふ意味から所謂女子國有とか女子共有と云ふ様な議論が出て來るのであります。要するに此處に眼を着けた今日の社會主義と云ふものは其の發足點は、近世の進化論者ダーヴィン、ハツクスレー以來の進化論に依つて非常に根強く根據付けられたのでないかと私は思ふのである。夫れは何故かといふに、之はかの『人者裸蟲之長』といふ方の見方より來る思想であつて、之は單に人間の特色とは認められない、凡そ生きとし生けるもの共通の本能であると思ふ、この性慾問題と云ふものは凡そ命のあるものは、總てに共通の問題である。現に其の邊に彷徨いて居る犬を見ても猫を見ても或は鶏を見ても、彼等は如何なる生活狀態をして居るかと云ふと朝起きて夜寝るまで求むる處は何か、喰べ物がそこに落ちて居な



いか、と云ふ食ふ問題、かりであります、其の外には雌メを求むる。即ち一日の仕事と云ふものは食ふことと異性を求むることとあります。また此の外に尙ありとするならば雄同志の噛み合ひ又は蹴合ふ、と云ふ様に強弱優劣の關係のみである。只だ之れのみである。孔子が『色食は性なり』と云つたさて、今日の社會主義者又は所謂新人などは之を金科玉條の様に思ふて、道がに孔子は偉い人で、『色食は性なり』と云つて居るさか。或は兼好法師はなかく判わかつた人で釋法師で其の人の書いた徒然草中には戀を知らぬものは『玉の盃底なきが如し』と書いて居るなどと嘆美する人もある様だが畢竟するに之は人間の所謂動物性を述べたものであつて、人間と動物と共通の本能、共通の動物性、即ちアニマリテイを論じたものであります。

### (五) 人間の特性

今日の社會問題、今日の思想問題を此のアニマリテイに根據を置いて議論すること、は一つの問題として見るならば云はば時代の反動として起つて來た問題と見ることが出来る。其の理由を説明するに先き立つて私はモウ少し詳しく人間の本性と云ふことに論議を盡して置きたいと思ひます。

此の動物性プラス人間性、……之を完備したものがお互の人類である。斯う云ふ様に私は見たいのである。人間の人間たる處はどこにあるか、動物と違ふ所はどこにあるか、孔子が『色食は性なり』と云つたつて色食を以て人間と動物との相違点と見ること、は出来ない、色食は人間にも動物にも重要な慾望である。之は人間のみがやつて居るのではなく、人間も矢張り動物なるが故にやつて居たのである。見方に依りては之を淺間しいと思ふ人もありますが、又見方に依つては、之が即ち人間も普通の動物も共通にさう云ふ本質に生れて居るので、之をやめてしまへば、人間もなくなつてしまふ。動物もなくなつてしまふ。人間と動物との共通の問題であつて、其の動物性以外に人間性が加へられたのが人間であります。即ち人間の特長は『裸蟲之長』に非ずして『萬物之靈』でなくてはならんと云ふことになるのであります。然らば何が人間と動物の違つて居る處か、人間には五官を持つて居る。然し乍ら動物も之を持つて居る。人間が眼でも物を見れば、動物も亦眼でも物を見る、處が其の能力を比較して見ると、人間が偉いか、動物が偉いか。先づ視力の點から云ふならば、皆さん御存じの猫の如き、人間より遙かに視力が強い、お互の人間の眼は夜になると見へない。然し猫は夜でも物を見る。お互の鼻は犬の様に主人を嗅ぎつけたり、異性を嗅ぎつけたりすること



は出来ない。お互の耳も相當聽へるけれども、兎の様に遠い處の微音も聽へる耳は持つて居ない。御互に足はあるけれども犬の様に早く走れない。お互に泳ぐことは出来ても魚の様には泳げない。況んや水陸兩棲動物と云ふものもある。人間が空を飛ぶと云ふことは随分昔から各民族の理想であつたと私は思ふ、其の證據には西洋の神様、エンゼル、即ち天使の後には必ず翼が描いてあります。夫れは空を飛ぶと云ふ意味であらう。又佛教でいふ天人は空中が自在に飛行出来るといふことである。考之等からふるも、人間が空を飛ぶことが理想であつたことは随分古くからであつたと思はれる。各國の民族には空を飛ぶ玩具が如何なる野蕃人にでもある。日本でも極めて簡單なのは昔からあつたのである。アノ、竹に穴を明けて小供が飛ばして遊んで居た、或は凧を揚げると云ふ様なことも如何なる民族も工風したことでありませう。即ち飛ぶと云ふことは餘程人間の理想であつたが漸く此の理想に到達したのが此の頃の飛行機である。理想と云ふものは野蕃時代から東洋人でも西洋人でも常に持つて居た。凡そ發見、發明と云ふものは社會學上からいへば、色々の理由から來て居るけれども、つまり當初は玩具であり遊戯であつたものが、後に實用化すると云ふものは往々にしてあります。

自轉車が始めて作られた頃は、自轉車に乗ると云ふことは遊戯であつて、實用ではなかつた。故に自轉車に乗ることは贅澤視せられて居つたが今日は最早や實用に變つて來た。自動車も左様で今日自動車に乗る人はまだ贅澤になつて居るが、而も今日も或る程度迄實用視されて居ります。更に實用なものに移るに違ひない。飛行機等もそうでありまして今にモット實用なものにならうと思ふ、處が此の飛行機も皆さんの御存じの如く稍もすると墜落する、然し之を天然に持つて居る處の鳥等には曾つて墜落と云ふことがない、……鳥が彼方に墜落して居る、雀が彼方に墜落して居ると云ふことは未だ聞かない。

即ち人間の持つて居る各部分々々の能力を分析して之を動物に比較すると、人間の能力必ずしも偉いと云ふことは出来ない、動物の方が部分々々で云ふと優秀なものを持つて居る。又同じ人間でも野蠻人と文明人とを比較すると野蠻人の方が鋭い五官を持つて居る。譬へば鼻でものを嗅ぐと云ふ様なことは野蠻人の方が文化人よりも鋭い能力を持つて居る。之は上篇にのべた文明病と云ふことに關係がある。一概に文化人と云ふものゝ寧ろ進歩か退歩か餘程疑問である。文明人の鼻は野蠻人よりも随分退歩して居る。鼻のみならず五官の總てが退歩して居る。過日の大地震の如きも、動物は



人間より早く之を知つて逃げた。鼠がそろ／＼逃げ出し、鳥は飛び出したと云ふ話は随分ある。雉は早く地震を知ると云ふことは動物學者も申します。彼の野蠻人も天災を早く知ると云ふことである。

そうすると結局文化人と云ふものは退化して居るので、此の意味より云つて文明と云ふものは一種の病でないかと云ひ得るのであります。然らば人間の人間たる處は何處にあるか。之は極めて不明な様であつて而も高遠な原理が其處に横はつて居ると私は思ふ。而して之を一言で悉くすならば進歩と云ふ二字が人間社會の特長であると云ふことを論斷するに憚らない。何が進歩であるか。「進歩」の論をして居れば随分複雑になつて參りますが卑近に一二の例を話してみよう。我々御互の衣食住には非常に變遷の跡がある。例せば人間の食物には時代により非常に變化がある。動物の食ふものは少しも變化がない。牛が草を食ふことは昔も今も變らない。いつも同じものを食つて居る。着物がそうである、人間の着物には色々變化がある、昔から斯んな衣を着て居つたのではない、昔は毛皮の着物を着て居た時代もある、それに着物の型が變つて居る。或は和装が洋装になつたり、支那服が日本に入つて來たり、と云ふ様に色々變つて來て居る。頭の髪も又、チョン髷に結ふて居た時代もあつた。婦人の髪結び

方など變化は甚しい。建築もそうである。昔は土蜘蛛のやうに穴の中に棲んで居たのが、木造の家屋に棲んだり、石造の家屋に棲んだり、今後吾々の衣食住はどう變化するか豫想することが出來ぬ程違つて行くに相違ない。食物も昔は生物を人間が食つたに違ひない。人間がいつから、ものを煮たり焼いたりして食つたかと云ふことは一寸判らないが非常な變化である。又器物の上から云つて、今は瀬戸物も鐵器も色々な器があるがこゝまで發達する迄には人間は餘程進んで來たのである。極めて野蠻時代に斯の如き器具は持つて居なかつたに違ひない。そこで人間ももとは丁度今日獸がものを採る様に魚を採るにしても其他のものを採るにしても必ず手で掴んでそして食つたに違ひない。そうすると彼の女が糸を切る俗に云ふ糸切り齒……犬齒と云ふものは昔は人間に最も重寶であつたに違ひない。

#### (六) 用不用の法則

處が進化論に依れば使ふものは發達するし使はないものは發達しない、譬へば男も乳を持つて居るが之が少しも膨れない。女は乳が膨れる。何故かと云ふと女は乳を使ふから膨れる。私の知つて居る人が奥さんを亡くして恰度乳呑兒があつたので其の兒



を自分の床に入れて寝かせる、すると、兎もすると乳が欲しくて泣く兒は御父さんの乳をいつもくイヂツて居つたので乳がダン／＼膨れて来て、此の頃では何か液の様なものが出るこの話をして居つた。

進化論の方から云ふと、用ひるものは發達するが用ひないものは發達しない。之を用不用の法則と云ふ。車夫の様に足ばかり使へば足が發達する。鍛冶屋は指が堅くなり、手が發達する。所謂用不用の法則に依るのである。即ち此の法則から人間を見れば、人間が文化生活をやる爲めダン／＼退歩する。文明は一つの病であると云ふことを唱へる論者が斯う云ふことを云ふ、譬へば文明人と野蠻人を較べて野蠻人の方が却て鋭い感官を以て居る。私共の子供の時でも齒固めと云つて堅いものを食つたもので。此の頃の醫者は珫瑯質を害すると云つて堅いものを喰はせない。文明人は軟らかいものばかり食ふ。ロビンソンと云ふ人は斯う云ふことを云ふて居る。文明人は衛生々と云つて柔らかいものばかり喰いたがる。それ故將來は牛乳を飲んだりスープを啜つたりばかりする様にならう。そうすると所謂用不用の法則により今に齒が要らなくなる。之は道理のある言葉で日本でも維新前の人の方が今日の人より齒がよい、今日の方は非常に悪くなつて居る、それ丈け齒醫者が多くなつて居る、昔は御承知の如く

齒醫者と云ふのは鎮守の祭や何かで大勢人を集めて、『ヤツ』とか何とか云つて齒を抜いたものですが、今日は齒科醫なんか云ふものが出来て政府でも齒科の専門學校を造ると云ふ様になつて来た。而も齒は文化發達と共にますます／＼悪くなる様だ。

ロビンソンの説に依ると將來文明人は齒がなくなつてしまふ、それから電車とか自動車とか色々交通の便が發達して將來は歩く必要がなくなる、此の調子で行くと人間の足がダン／＼小さくなつて、しまいには室内を立つて歩けばそれ丈けで澤山と云ふ様になり、五臟六腑即ち腸胃などもモット短くなつてよい。之に反して生活難とか職業難とか……色々文明が進んで来るに従つて人間は頭ばかり使はなければならん。従つて文明人は頭がダン／＼大きくなつて来る。頭の毛は頭を保護する爲めにある。處が文明人は帽子を被る。それで毛の必要がなくなる。だから文明になるとダン／＼禿が多くなるといふのです。之は事實です、私が西洋に居つた時日本と比較して西洋程禿の多い處はないと思つた。恰度私はベルリンの取引所を參觀した時、五階の上から取引をやつて居る人を見卸しますと其の頭の上の方がバツと明るい。尤も上から見から……マア天頂の方が禿げて居たからです。これが一人や二人でなく殆んどすべての人が禿頭だから、明るく感じたのである。



私は女子教育を永い間やつて居りますので西洋に居る間も女學校等をよく見ましたが、西洋の女學生は日本の女學生程頭の禿を問題にしない、日本の女學生等はあの人を旦那様に御世話すると云ふとアンナ頭が禿げた人は厭やだ何かと申します。又女ばかりでなく男の方でもそうです、私なんか一寸人に遭ひますと、頭を見て、ヤア大分來ましたなア……等と問題にして居るが、之は西洋では決して申しません。西洋ではそう云ふことは普通になつて居る。今日本ではそう云ふことを云ふ丈け禿げの人が少い、之等も用不用の法則で、用ゆるものは發達し、用ひないものは發達しないと云ふ譯であります。

### (七) 誤れる文化生活

皆さんが居村に御歸りになつてよく話して貰ひたいと思ふことは青年の指導です。青年が贅澤に流れると國が衰へる一方であります。近來田舎……農村でも一般に少しく教育を受けると労働を厭やがる風がある。そうして役場へ出るとか、或は小學校へでも代用教員に出るとか云ふ様な譯で兎角學校を卒業させても皆土地から離れたがる之は非常に間違ひで、一體文化と云ふのは英語で云ふと「カルチュア」と云ふので、

それはどんな意味かと云ふと、鋤くと云ふ意味から來て居る。百姓が土地を鋤くと云ふのが文化の意味で、文化と云ふものは土から離れて都會化することではない。之は文化のもとの意味とはスツキリ間違つて、土地も耕やさずに文化ちや、文化生活ちやなんか云つて居るが農村の子弟は文化の根本の意味を忘れてしまつて居る。農學校を建てることは非常に結構なことであるが、農學校を出たものが農業をやらないと云ふ様なことになつて参りますならば、所謂カーベントターの言つた通り文明と云ふものは一つの病である。どんな病であるかと云ふと、田舎の人が労働を避け、農夫が土から放れやうとする病である。

女學校でも矢張りそうである。女學校を卒業すれば洗濯や雑布掛けを厭やがる。フランス等ではそう云ふことをするのが立派な女で手が汚ないことが立派な女の表徴であるさへ云はるゝ。之は労働をするから立派な女と云ふので日本の今の女學生は労働を厭やがる。之は手が荒れるからで、手が荒れて居るのを立派な女であると云ふことをフランス邊りですら云つて居るのに、日本の此の頃の文化生活と云ふことは随分間違つたことをやつて居る。



(八) 新思想か舊思想か

人間はいつ頃から此の地球上に棲息して居るか。之は實に問題です。昔から色々に説いて居る通り人間の始めはどんなものだったか今にわからない。最初の人間は天から落ちて来たか云つたり、或は西洋などでは神によりてつくられたアダムとイブが人間の始めだとも云つたり、或は又石や岩が化けて人間になつたと云ふ神話もあり、或は又人間と云ふものは始めがないと同時に終りもないなども云つたりする。斯う云ふことになるか結局判らなくなつてしまふが、又今日サイエンス即ち科學の上に於ては、地球成立の始がある以上は、人間はそれ以後に出来たことは確かだと云つて居る。然し人間が此の世に初めて生れ來つた年代を推測することは至つて困難である。或は地球は一度氷で張りつまつた氷原時代などのことから推論し、その氷原時代以前に既に人類が地球上に棲んで居つたといふ地質學上の人骨の化石の發見から、凡そ二十幾萬年前には己に人類が居つたと云ふ説がある。しかし、人類の始源の時代は果していつ頃かといふことは依然わからない。人間が此の氷原時代より以前に棲んで居た。それが今より二十幾萬年前であつたと云ふ丈けである。それから見ればギリシヤ文明が

二千年とか印度文明が三千年、エジプトのピラミットが六千年七千年……之等が一番古いと云つて見ても結局僅少の歲月である。

近來世人はしきりに新思想などと云つて無暗に新らしがる人があるが、何が新らしくて何が古いのか餘程根本的に吟味する價值があると思ふ。社會主義、其の他の思想を以つて今日の思想の様に思ふ人もあるけれども夫れは間違ひである。今から二千年も前に既に西洋の學問ギリシヤ時代の學問で今日傳はつて居るものの中には、今日唱へて居る處の、彼の社會主義者彼の無政府主義者或は女子共有論者。之等の思想……この三つが今日の危険思想とも云ふべき思想の歸結の代表的のものである。夫等が今から二千年も前の書物にチャンと書いてある。だから社會主義なんて云ふものはそんなに新らしいものでない。

皆さんもよく御存じの通り、昔の劍つるぎにしても、鏡にしても、よくもあんなに立派に古代に於て出来たものであると驚く次第である。古い墓場から出る精巧の細工はあれは朝一夕に野蠻人があゝ云ふ劍、あゝ云ふ鏡を製作する時代に遡かに至るものではない。日本でも随分古い時代の發掘物……九州あたりでよくいろいろのものが出る。首飾、其他いろいろのものが出る。斯う云ふものを人間が作る迄には餘程年數がかゝ



る。日本文明も決して歴史で傳はつて居る丈けが日本文明ではない。最も古い支那に於ても同様、其の他に於ても同様である。

### (九) 原始社會の男女

夫よりも尙古に遡つて此の人間の原始社會に於て人間が如何なる生活をして居つたか。原始社會の人間生活は所謂雜婚時代、即ち夫婦關係がなかつた時代である。或は之を亂婚時代ともいふ。即ち男と女は氣の向いた時に勝手に喰ッ附いて居た。そうして見れば今日の犬猫と餘り變らない。従つて出来る子供も誰の子供と云ふことがわかない。只だ母丈けは判つて居るが父親は判らない、之が雜婚である。

極めて蒙昧な野蠻時代に於ては女が子を生むと云ふこと、男と女が關係するといふこととの間に因果關係があると云ふことを知らない。今日動物がそうである。之を意識する様になつたのは即ち人間結婚進化の道程に於て夫れ丈け人間が伶俐になつたのである。原始時代に於て亂婚の時代には女が非常に有力なものであつた。之が所謂母系時代と云ふので、女の系統を尊び一向男の系統を尊ばない。處が聽て男の力がだん／＼増して來てそうして以て父系時代を作るに至つた。此の父系時代になると男は

女よりも強者と云ふ様になつた。それに就いて茲に一寸面白い話がある。

### (一〇) 女性中心説

女が中心であつた野蠻時代から、男が威張る此の時代がどうして出來たかと云ふことになると、之に就ては社會學者で女子中心説を唱へる人がある。古代は寧ろ女子が威張つて居て女が天下を支配して居た。それがいつの間にか男が天下を支配することになつた。此の道程はどうして斯の如く移つて來たかと云ふと、いろ／＼の説もあるが代表的な説として尤もと思はれる説を一つ紹介して見たいと思ふ。

世の中を作るものは男か女か……世の中を作るものは女であります、誰が何と云つても次代の子孫を作るものは女が主だ。一體女と云ふものはどんなものであるか……次の社會を作るものが女である。

その一例を茲に書いて示そう。極めて下等動物で雄とも附かず雌とも附かないもの繁殖は、所謂細胞分裂に依る。即ち一個の細胞が二個の個體に分裂する。この時には未だ雌雄の別はない。然るにこの一個體の中に刺戟的作用を爲すものが生ずる。之が游離して後には一つの個體となる。それが雄である。故に男性と云ふものは睾丸の



母體から游離して獨立したものであるといへる。そこで男性の使命は女性を攻撃して兒を生ますと云ふことである。故に男性の生物的發達を觀察すれば雌を攻撃して夫れで自己の本能を満足して居る譯で、之が爲めには命を取られても仕方がないのである。雄の役目は雌と交接すること、其の役目が済むと直ぐに雌に喰はれてしまうものがある。斯うして見ると男性の運命と云ふものも實に憐れなものであります。

この際若し男性に一種の愉感興味がそれに喰い附かなかつたなら、男性はかゝる役目を勤めないであらう。そこで自然は斯の如き犠牲を拂ふ事柄に對して一種の興味快樂を附與して置いた。斯う云ふ風に生物學上説かれてある。そこで男と女の態度を比較すると男の態度はどこまでも攻撃的である。女の態度はどこまでも受身である。そう云ふと男が偉くて女が偉くない様であるが實はそこが女の偉い處である。どうかと云ふと女は極めて冷靜に凝つと男を見て居つて、此の男子ならばと思つたものでなければ自分の身を委せない。又自然は大に女性を保護して居る。動物でみると、自然はいつも雄よりも雌を保護して居る。例せば蟬には鳴く蟬と鳴かぬ蟬がある。鳴く方が雄で鳴かぬ方が雌であります。それで雄は雌に較べて外敵に見附かり易いので、小供や鳥等に採られる。蠶さくらんぼもそうであります、玉蟲は雄が美麗めいれいであるから敵に見附かり

易い。又鶏や其他の鳥でも悉くそうであります。そこで雄はいつも敵に見附かつて採られる。斯の如く自然と云ふものは雌を保護して居る。大自然は、いつも女性を保護して男性を危険な立場に置く。此の筆法で人間でも戰いくさの時は男が戰場に行き、女が家に残つて居るのも全く動物のこの原則と同じ様に見られるのであります。

野蠻時代では戰をするに敗けた方の部落の男は皆殺されてしまう。そうして女は殺されない。昔の物語りにもある様に女は連れて歸つて會長の妻にする。斯う云ふ場合に於て女は命を全ふする。即ち女性に男性よりも得な役廻りに出來て居る。これは女性本位に考へる人が説く所である。

然るに之に反して、男子本位に考へる人は次の如く考へる。女性は弱者で男性は強者である。動物界を見渡しても、いつも雄が強くて雌が弱い。牛の様な角のあるものも、雌の角は細長くて弱い。雄の角は太くて強い。鹿等も雄には角があるけれども雌にはない。軀でも雄の方が大きい。如何なる國民でも男が背が高く大きい。女は小さい。動物界を見渡しても此の状態は同様である。たゞ昆虫類に例外を見るばかりである。其の一例を挙げますと蚤は雄は小さくて雌が多きい。人間の夫婦でも女の方の大きいのを蚤の夫婦と云ふのは人の知る通りである。畢竟するに宇宙間を見渡すに



男性は常に骨格が堅く、肉も堅い。鶏なんかでも雄の肉は堅い。故に學者中には、女とは小供と男子の中間物で、成熟の途中で止まつたものだ。故に女は男に比して、肉も柔かい。骨格も細い。力も弱い。凡ゆる方面から觀て男が偉い、女は偉くないと云ふのです。之に反對して男の方が實は偉くないので、女の方が本當に偉いのだと云ふのが今申した所謂女性中心説です。即ち男なるものは睪丸が游離して一個體を成したものに過ぎないとすらいふのです。此の女性中心説に従ひますと何故男が女より今日丈夫な軀になつたかと云ふと、之れは生存競争の結果であるといふのです。今一例を示しませう。

臘肭臍が島に棲んで居る状態は、島中に雄が一匹で澤山の雌と共に棲んで居る。其處へ又他の雄が他所の島から泳いで來たとすると、其の臘肭臍と、前から棲んで居る王様の臘肭臍が忽ち喧嘩する。若し他から泳いで來た臘肭臍が敗けたらそこで喰ひ殺されてしまう。之に反して後から來た臘肭臍が勝つたら今度は其の島の王様になつて、澤山の女性を支配する。即ち一夫多妻である。此の理窟は人間の野蠻時代に於て行はれた。否今日に於てもある意味に於て行はれて居ると思ふ。夫れはどう云ふ現象かと云ふと、此の野蠻時代に於いては、男が或る女に氣に入る様にするには、まづ男は骨

格の逞ましい、背の高い、強いものでなければならぬ。そこで男は男と競争する。敗けた男は殺され、勝つた男が残る。かくしてダン／＼強い男が生き残ると云ふ譯で所謂優勝劣敗が演せられて居た。お互が斯うして生きて居るのも先祖が強かつたものゝ子孫である。そこで女は横の方で男性相互の競争を見て居て、後から結局勝つた方へなびく。するいと云へばずるい仕方です。今日の社會現象を見ても隨分之に類した處があります。徳川時代では女はまア學問もしなかつたが、今日の女は女學校を卒業すればすぐ立派な細君となる資格があることになつて居りますが、男子は中學校を出た位では却々生活するに容易なことではありません。其の女學校と中學校を比較すると今日の女學校は中學校より遙かに劣つて居る。今日の高等女學校は、中學校と比すれば丸で低能兒教育とも云ふべきであると思ひます。何故かと云ふと男子の中學校等では作法とか云ふ様なものは教へて居ない。男は『今日は』と云ふ位の挨拶は常識でやつて居るのに、どこの女學校に行つても行儀作法と云つて立つたり坐つたりして貴重な時間を費やして居る。此の意味で低能兒扱をされて居る。この外學課の内容についても同様である。かゝる女學校を卒業したものが立派な奥さんになり、或は資本家の奥さんになつたり、又は大學を出た立派な人の奥さんになつて居る。必ずしも學校を出



なくとも、女と云ふものは立派な處へ嫁ぐ。之に反して男はどうかと云ふと、假令高等學校へ入るにしても一寸入學試験が六ヶ敷い。夫れから後に又大學を出て幾何の月給が貰へるか云ふと、銀行等で僅かに六七十圓の月給を貰ふのが普通である。處が女の方は勞せずして夫と同じ待遇を受けて夫と一緒に出世して居ると云ふ様な方面を考へて見ますると、結局女が懶巧か男が懶巧か判つたものぢやない。

## (一) 禁慾の教

で前にも申しました様に當初の人間と云ふものは本能生活をやつて居つた、當初の野蠻時代に於て人類の生活は本能生活即ち動物生活であつた。何故かと云ふと異性を漁り食を漁るのみで今日の様に土地を耕すと云ふ様なことはズツと後であります。だから此の時代に於ては彼の社會主義者もなければ政府もなければ資本家も夫婦關係も何もなかつたのであります。今日の社會主義を論ずるものは稍もすればアダム、イブの昔は政府もなければ夫婦もない、資本家もない。極めて自由な社會であつた。今日の社會組織と云ふものは後世の人が勝手にしたものである。吾々は之を當然人間として爲さなければならぬ、従はなければならぬ社會組織と思ふは間違ひであると云ふ

様に説く。茲に非常に誤りがあることを私は指摘したい。

吾々人類の共同生活と云ふものは、そんな一朝一夕に机上の空論で出来たものではない。吾々累代の祖先の生活と云ふものが人間生活の基調を造つて来た。彼等が一寸西洋の書物を開き氣まぐれに社會組織を論ずる様に社會と云ふものが出来たものではない。いろいろの變化の結果、淘汰に淘汰を加へられて續いて来たのが今日の社會組織である。即ち世の中の進歩と云ふものは決して一朝一夕に出来たものではない。日本の二三千年前、支那の三四千年前の文化すら、却々容易なもので其處まで發達したものではない。堯舜時代と雖もそれまでに發達さす爲めに永い間骨を折つた結果である。此の人類を動物的生活からもう少し理性ある生活に向上せしめようとしたことが西洋でも東洋でも日本でも從來聖人賢人と云はるゝ人の努力であらうと思ふ。どう云ふことに努力したかと云ふと、人間が食ふことゝ性慾とのみに其の日其の日を没頭して居たならば、人間文化は生れない。文化と云ふものは人間時間の餘裕から生れて来る。即ち食ふ爲めに働らくことゝ、性慾生活以外に閑暇があると云ふことが世の中の文化を發達させて行くことに必要である。社會學では之等をレージュアークラス……閑人階級と云つて居る。この閑人階級と云ふものは今日稍もすると誤解せられて、勞



働者等からあゝ云ふものは國家の無用のものだと云ふ。此の閑人階級と云ふものは如何なる階級の人間であるかと云ふと、此の閑を利用して、美術或は藝術をやる、文學をやる。斯う云ふことが閑人階級の仕事である。即ち職業上から云ふならば宗教家、學者、藝術家など云ふ様なものは皆此の閑人階級である。之等の人達の過去の努力が今日の文化を造つたのである。即ち食ふこと、性慾生活に焦慮すること以外に時間があつて、其の時間を利用して、智識を研ぎ、藝術を究め、宗教を説くと云ふ様なことが今日の文化が出来て來た基である。そこで之等の人は凡ゆる方法を以て人間の價値を加へさせ様として本能生活を抑へやうとした。其の爲めに起つたのが私の獨斷かも知れないが禁慾の教である、禁慾と云ふと佛教丈ぢやない。昔から禁慾を教ふるものは、色食の二つをつまらぬものとし、男は女に近附くべからず、女を穢はしいものとした。又食ふと云ふことも同様で、美味いものを食いたいなごとそんなことに執着して居つては智が研げない。と云ふのが禁慾の教へであつて印度、支那、日本に於ける佛教は勿論、支那に於ては孔子の教へに於てすら、士たるものは惡衣惡食を耻づるものは、未だ以て共に語るに足らずと戒めた。西洋では宗教は勿論であるが、ストア哲學等の禁慾哲學もあつた。要するに斯の如き禁慾の教へが説かれたのは、皆人間の

本能生活を抑へて、此の人間性を發揮させる爲めである。即ち動物共通は動物性とは別な人間特有の『人者萬物之靈』を發揮させやうとした。だから本當の人間意識と云ふものは動物と云ふものから放れて、『人者萬物之靈』に生き様としたのであります。動物のやつて居る普通の本能生活から超越して人間性を發揮しようとしたのだ。だから之を神の性とか佛の性とか云ふ。而して『人者裸蟲之長』を以て生活しやうとする今日の社會主義者、經濟學者は動物性に人間を置いて居る。人間の本質は人間意識……即ち『人者萬物之靈』と私は解釋したのであります。でありますから人々に成るべく此の人間生活をする爲めに、動物慾を抑へよと説くのであります、それを押へ附ける代表的なものに宗教家等と云ふものが自ら範を示すと云ふ譯で、肉食妻帯を禁じると云ふ生活を日本でも西洋でもやつたのであります。處が之が理想通り行はれたかと云ふと却々うまく行かなかつた。餘りに『裸蟲之長』たる動物生活を禁じた爲め、僧侶生活は絶対に女を近附けない。此處が問題であると私は思ふ。人間が萬物の靈長であつても、素々動物である。地金が動物である。其の地金の動物を發達向上さす爲め『裸蟲之長』に制限を加へる。今日の一夫一婦が夫れである。どこの文明國へ行つて見ても法律上は一夫一婦であるが男子が生れてから死ぬる迄『私は女房の外一切女を知り



ません、』と云ふ人もあるにはあるが、それは至つて少なからうと思ふ。即ち一夫一婦の制度の如きは禁慾でなくして制慾であります。之は又そうなければならぬことです。哲學も其處にありませう。社會の秩序を保つ上に於て必要であります。而し事實の上から見て……眞面目な眼から見て人間には一種の性慾の本能を持つて居る以上、稍もすると世の中には間違ひが起り易い。其の日其の日の新聞を見ましても、斯う云ふ方面の問題が起つて居ると云ふことも地金が動物であるからであります。『人者裸蟲之長』たる特性を押へ慾を制して、そして社會の秩序に害なき堅實なものゝみを探つて『人者萬物之靈』たる特性を發達させる。今日の經濟組織に致しましても、悉く人の慾を根本的になくする譯には行きませんが、人の所有權を侵さない程度に減じて居る。又人間としては誰しも權力の慾望を持つて居る。而し乍ら政府と云ふ一つの組織の下に於て之等の自由を許されて居る。然るに所謂社會主義では今日の國家の下に於ける自由では、之は虐待の自由で眞の自由ではないと云つて居るが、眞の自由即ち絶對自由を求めることになる。結局動物生活になつてしまふ。

## (二) 人間意識の發芽

處が前申しました様に絶對禁慾主義と云ふことは結果に於て面白くなかつた。譬へば日本で申しますならば高野山であります、或は比叡山であります。又西洋で申しますならばローマ法王廳であります。その様な處では又不自然な性慾關係が起つた。日本の風俗史を調べて見ると、男色等と云ふ様なことが往々斯の如き社會から生れて居ります。と云ふのは、如何にしても人間の地金が動物であるから『人者裸蟲之長』を絶對に禁することは間違ひであると云ふことが唱へられて來た。西洋に於てはローマ法王廳の腐敗は非常に甚しきことがあつた。之がマルチンルーテルが宗教改革を起した所以であります。

時偶々ヨーロッパには十字軍があつてヨーロッパから亞細亞の方へ遠征に行つた。そうして之等の人々が旅行をして知見が廣まりました。どこの國にも神様がある。自分の國にも神さまがある。何方の神様が本當か。どこの國にも政府がある。自分の國にも政府がある。何方の政府の治め方が本當の治め方であるか。などと云ふ様な疑を持つた。斯の如く致しましてだん／＼に神に對する疑を持つ。國家の治め方に對する疑を持つ。そして人々は知らず／＼に智識が進歩する。即ち科學が發達して行く。そこへ印刷術が發明される、紙が發明される、そこで今迄智識と云ふものは非常に精練



された人丈けにしかかなかつたのでありますが、容易印刷が出来て、之が發表されることになりまますから、如何なる方面にも智識が普及されることになつた。例せば鐵砲が發明されて所謂封建時代が壊れてしまつた。紡績機械が發明されて、今迄の工業と云ふものは家庭工業であつたものが今度は機械工業となり、今迄小規模にやつて居たものが大規模に行はれる様になつた。即ち宗教改革と云ふ様なことから信仰の自由と云ふ様なことを唱へ出し、産業の革命から職業の自由、事業の自由、或は經濟の自由が唱へられ。政治上の革命から、政治上の自由、即ち政治と云ふものは自分等の運命に關するものであるから自分等は相談に與らなければならん、と云ふ様になつて、現行はれて居る處の代議政治が行はれ、更に進んでは労働の自由と云ふことが今日唱へられる様になつたのであります。其の結果は如何であるか。之からモ少し説きたいのであります。二時間も御話ししまして大分御疲れの方もありますから一寸少憩致しまして結論に致します。

### (一三) 人間意識の發達

理想として企てられたこの禁慾の教は、どんな結果になつたかと云ふと、宗教に於

きましては禁慾主義の爲め、不自然なことが行はれ、或は又一種の迷信を鼓吹する様なことになつてしまつた。譬へば基督教では、葡萄酒を飲み、麵麩を食べたなら、キリストの血を吸い、キリストの肉を食べることになる。などと唱へられたから、宗教改革のルーテルは、麵麩を食はずとも、葡萄酒を飲まずとも、心に神を信じ、心に神を念すれば、天國へ生れると云ふ様に唱へた。封建時代に於て、大名が非常に横暴を極め、所謂大名生活をなして町人百姓を苦しめたのである。處が封建制度仆れ、産業革命の結果生れ出たものが資本家であります。マルクス一派はこの資本家を攻撃して資本家は多數の職工を使ひ、職工の働くことに依つて得られた處の利益の大部分は之を壟斷して、僅かな賃銀しか職工に與へない。茲に於て大名が世の中に巾を利かして居つたと同様なことを今度は資本家がやつて居る。資本家が出た爲めに非常に社會に貢獻した點もある。譬へば、今日鐵道を敷設するとか、或は大きな汽船を造るとか、或は紡績會社を起すとか云ふ様なことは、今迄個人の仕事時代には到底出来ることではない。處が大きな機械を据附け、大規模の生産を爲すと云ふことは全く資本家の賜物で、今日の文明は全く資本家の御蔭で出来たものである。然し乍ら夫れと同時に資本家の贅澤横暴と云ふことは、之は昔の大名以上の贅澤をやつて居る。文明の利器を利



用して居る今日の資本家の贅澤と云ふものは、到底昔の大名の及ぶ處でない。であるから、此の邊で資本家も一つ年貢の收め時として吾々労働者に譲るがよからう。今は労働者の天下である、と云ふ様なことは此の二十世紀に起つて居る聲であることは、皆さんがよく御存じのことです。要するに斯の如く近世に至り、自由を叫び、平等を唱へる様になつたのは、之は世界の大勢であるが、此の世界の大勢の根本に何が横はつて居るか云ふと、一つの思想問題が横はつて居る。其の思想問題とは何であるかと云ふと、今回の講習に私が掲げました、**人間意識**と云ふことでもあります。人間らしい生活をするに云ふことでもあります。今日の労働者が八釜しく云つて居る何時の間労働と云ふことも、みんな彼等の頭腦に人間意識が發達して來た結果であります。十九世紀の後半に於きましては、御存じの如くアメリカに南北戦争がありました。一千八百六十年から一千八百六十五年にかけて南北戦争がありました。其の結果遂に北方の主張が通りまして奴隷解放となりました。今迄はアメリカでは奴隷を使つて居たが、此の奴隷も人であるけれども、人間と思つて居らなかつた。一種の機械と思つて居つた。だから賣買もすれば、鎖で繋いで逃げない様なことをして居つた。それでアメリカの識者の間に人間意識と云ふものが發達して、同じ人間であるのに獸物の様に

鎖で繋がれて、市場で賣買されると云ふことは怪しからぬことである。所謂人道問題である、と云ふのが此の奴隷解放の聲でありました。即ち**人道問題**であると云ふのは私が此處に云ふ、**人間問題**、**ヒューマニテイの問題**であります。

#### (一四) 婦人の自覺

之が又フランス、イギリスを始めヨーロッパの婦人に影響致しました、即ち奴隷が解放された。奴隷も人間であるとして、人間らしき取扱を受けること云ふことになつた。然らば昨日も一寸申しました様に多年人間らしい取扱ひを受けずに差別的待遇を受けて居つた女も、男と同じやうに人間待遇を受けなければならんと云ふ考へが、ヨーロッパで米の奴隷解放の聲と共に非常な勢を以て聲援されました、烽火を擧げて來たのであります。之がヨーロッパで八釜しい婦人問題であります。

當初今日の此の所謂人間意識、或は自由平等の思想をヨーロッパ人の頭に吹き込んだ學者は誰かと云ふと、彼のルッソーを代表的人物として擧げることが出来ると思ふ。ルッソーはフランスの人……實はスキツルの人でありますが、すつとフランスに住んで居りましたから、フランス人といつてよい位です。フランスの國では、至る處



にルツソーの銅像があります。此のルツソーの書きました一番有名な著書に社會契約論或は約して民約論といふのがあります。世の中はお互の契約の上に成立して居る。いろ／＼の方面に働く人もお互に助け合ひ、即ち一種の契約に依つて社會と云ふものが成り立つて居ると云ふのがルツソーの考へであります。そこでルツソーは概そ人間として此の世の中に生れた以上、皆が自然に持つて生れた處の天賦の權と云ふものがある。何れも人は自由平等であると云ふことを説いたのであります。

處が茲に面白い問題がある。ルツソーの云ふ處は非常に立派である。「人は總て平等なり」といふのである。總ての人間に此の人間意識を認めただのであります。處がルツソーは本當にそう思つて居たか疑問であります。何故疑問であるかと云ふと、ルツソーは「人は總て平等なり」と口で言ひますけれども、彼は男丈けのつもりで云ふて居る。女は其の中へ入れて居なかつた様だ。其の證據は色々の方面へ顯はれて居る。處がフランスの婦人は「人は總て平等なり」と斯う書いて居るルツソーの書物を讀んで非常に賛成した。「人は總て平等なり」、吾々女も亦人なり。然らば女も亦男と同様平等なりと考へたのであります。人の中には男も女もある。當時ルツソーが女と云ふことを除いて、「男は總て平等なり」と云ふたのでは勢がない。どうしても茲では「人は

總て平等なり」と云はなければ勢がない。それで「人は總て平等なり」と云つたのであります。之を讀んで婦人は非常に賛成をした。吾々女も人間だ。然らば吾々女も平等である。と云ふのが當時の婦人の聲でありまして、どう／＼十八世紀の末……一千七百八十九年の十月五日に婦人の或る團體は、フランスのヴェルサイユの宮殿に進軍致しまして、吾々婦人にも自由を與へよ、吾々にも參政權を與へよ、と云ふ様なことを時の皇后に申出たのであります。そうして出來たのが彼の有名な女權宣言書と云ふものであります。

「國家は國民を基礎とし、國民は男女の協同に依つて成る。而して國法は國民全體の意志を表はすもの、なければならぬ。従つて女も亦男と同じく立法に參與するか、然らざれば其の代表者を選擧して之に參與せしめなければならぬ。若し一國の憲法が國民全體の利益を考慮せず、又國民全體が之が制定に參與するに非ずんば、其の憲法は無効である。」と云ふ様な宣言書を當時出したのであります。處が夫れから暫く經ちました一千七百九十三年十月三十日、フランス議會は、どう／＼此の婦人團體に解散を命じてしまつた。當時此の解散に依つて一頓挫を來しましたけれども、それから以後婦人の頭の中に於ける人間意識……吾も人であると云ふ、此の人間意識は、到底取り



去ることは出来ません。其の後曩に申しました如くアメリカの奴隷解放問題が許可されること云ふ様な譯でありますから、又勢を得て、今日英國に於て見るが如き、猛烈な運動となり、又ヨーロッパ各國の或る國の如きは、ポツ／＼婦人の參政權を許さなければならん、婦人官吏を認めなければならんと云ふ勢になり、又許して居る國もあるのであります。

### (一五) 世界の趨勢

此の世界の趨勢は昨日申しました如く、世の中と云ふものは完全になるに従つて、各部が均等に發達しなければならん。世の中はお互の持ち寄りである。……持合ひである。と云ふ考へが又今日申しました、人間意識と云ふ考へ……人間であると云ふ考へで、之は我が日本に於きましても、今日は津々浦々まで瀰漫して居る思想であると思ひます。又此の思想に對しては誰一人向ふに立つて反對することの出来ない思想であると私は思ひます。

明年度に政府が普選を議會に提出するに至る様な模様が見えて來たに就きましても今日日本の識者中に、婦人にも參政權を與へなければ本當の普選でない、と云ふ様な

聲が出て居ります。此の聲は將來だん／＼強くなつて來るであらうと私は思ふ。然し問題は今日の總ての日本の婦人が、其處まで考へて居るか。其處まで目醒めて居るか。問題であります。もう一つは其處まで婦人を政治に踏み込みましむることが婦人に至大の幸福を持ち來すものであるか、どうかと云ふことは、別に大に論ずる必要がある問題であります。今日此處で申述べようとする問題ではありません。然しながら今申しました如く、斯の如きが世界の趨勢であります。

### (一六) 所謂差別待遇について

斯の如きが近世文明の特長であります。斯の如きは昔と意味を變へて所謂人間性の發揮である以上同じ日本で、同じ皇室の下に、同じ言葉を話し、互に助け合つて有無相通する各自の仕事に従事して居る、此の國內の部落々々に依つて、其處に差別待遇がある。其處に差別的習慣が用ひられると云ふことは、今日此の近世思想の問題から云つたならば、最早や茲に論ずる迄もなく、問題とならぬ問題であると思ふ。然し乍ら世の中に、何故今日斯の如きことが残つて居るか。之が最後に注意すべき點であると思ふのであります。



此れにはいろいろ原因もありますけれども一つは今云つたルツツの犯した誤りを日本國民が犯して居りはせぬかと思ひます。ルツツの犯した誤りとは何であるかと云ふと、ルツツは「人は總て自由である」、「人は總て平等である」と云ふ事を論じて居り乍ら、女の事を迂濶して居つた。何故迂濶して居つたか。之は女の問題をそれほど思つて居なかつたのであらう。自分が男である爲めに、女を考慮に入れなかつた。若しルツツ其の人が女であつたなら、女を忘れず……女を頭のうちに置かないで、「人は總て平等である」とは云ひ得なかつたであらう。此のルツツの誤りを稍もすると、世界の人が犯して居る。日本人も犯して居る。譬へば今日の労働者が資本家の横暴を唱へるはよろしい。労働者も亦人間であると云ふことを主張するもよろしい。今日の所謂デモクラシーの思想を高唱するのも悪くはない。然し之等の労働者が又ルツツの誤りを犯しては居らぬかと思ふ。今日労働者は、或は會社に勤め、或は工場に働らいて居ります場合に、重役が横暴をする、資本家が横暴をする、或は又自分を指揮命令して居る上に立つ人が兎角自分を使用人扱ひにする、と云ふ様に不平、不満を持つて居ることは私共が日常見聞する處であります。そして此の労働者等は、此の平等の世の中に……此のデモクラシーの世の中に、何と云ふ人の人格を侮辱する様な横

暴をやるか、吾々労働者も亦人であると云ふ。それは極めて立派な云ひ分である。たが一步退いて、之等の労働者達の家庭を見ますと、一日労働して宅へ歸る。まア湯に入る。或は夏なら行水を浴びるとかして、臺所、或は火鉢の前で組膝でもかいて、肩なんか抜いで、そうして酒でも飲まうと云ふ時の此の労働者の態度は、マア家庭の國王の様な態度を採つて居る。所謂亭主關白の位である。「おい女房一杯注げ」とか、女房に向つて何と云ふ言葉を用ひるか。よく女房に、「オイ」「コラ」「貴様」と云ふが、女房が夫に對する言葉は「内の人」とか「主人」とか「亭主」とか或は「アナタ」とか丁寧な言葉を使ふ、全く之等は差別待遇でなくてなんでありませう。之を以て總て人は平等であると云ふことが出來得るであらうか。「イヤ夫れは言葉だから」斯う皆さんは云ふかも知れないが、然らば此處に一つ例を出そう。

英語には「ユー」と云ふ言葉が一つしかない。日本では貴様だとか、お前とか「アナタ」とも云ふが、英語は此の「ユー」一つです。此れ程、平等はない。佛獨その他の國に參りますとニツの區別がある。夫れは國々に依つて違ひますけれども「アナタ」と云ふ意味の言葉と「お前」と云ふ言葉と二つがあります。即ち佛語の、「ブー」と「チュー」ドイツ語の「ジー」と「デウー」、此の言葉がどう云ふ様に使ひ分けられて居るかと申し



ますと、小供等は一人前の人格者でないから、大人が小供に對しては皆「お前」、小供は大人に對しては皆「アナタ」。だから家の召使、下女に對しても小供は皆「アナタ」と云ふ。召使下女は小供に對しては嬢ちゃん、坊ちゃんに對しても皆「お前」と云ふ。主人が女中等に對して何と云ふかと云ふと、矢張り「アナタ」。そんなら夫婦は何と云ふかと云ふと夫婦は双方から「お前」とよびあふ。之は極めて親しい間柄でありますから夫れで好い。それから大學生や、労働者の間でも皆双方から「お前」で朋輩同志の親しい間柄は皆「お前」で恰度日本で「君僕」と云ふ譯であります。斯の如くドイツ、フランス或は英國でも人類平等の觀念から言葉が使はれて居る。英國に於ては「ユー」一つで如何なる高貴の方に對しても「ユー」より外にはない。然し昔は、そうでなかつた。英語には「ザウ」と云ふ言葉があつて、今では詩等にしか使つて居ない。フランス、ドイツ等も昔は女中等には「お前」と云つたのですが此の頃では決して使はない。昔の古い芝居等を見ますと、主人が出て來ると女中なんか皆頭を下げて、「アナタ」と云ふ言葉を使つて居る。そして主人が召使に「お前」と云ふ言葉を使つて居るが、舊劇には澤山ありますが、今日は之は用ひられない。ドイツの田舎の方に行くに舊式の家では、私共の居つた頃はまだ女中に「お前」等と云つて居るのもあるとき

たが、そう云ふ處は女中が續かない。夫れはあの家では人格を認めない、と云ふので女中に行くものがない。此れなんかも只だ一寸「お前」と云ふか「アナタ」と云ふかの違ひであります。斯う云ふ様な結果を見ると云ふことは一體何を語るかと云ふと、所謂人間意識と云ふものが總ての使用人に迄發達して來た結果であります。即ち此の間味と云ふものが、だん／＼發達して來たからです。此の傾向は聽て日本にも入つて來るものと思ひます。現に私の知つて居る人で某所の勅任官ですが、其の奥さんが私の所へ遊びに來て、近頃私の家の主人が妾に「おまへ」と云ふと返事をしないことに極めました。主人も私に「アナタ」と云はなければ返事をしないことにしました、と云ふ様な話をして居りました。

それから今の労働者の話ですが、彼等は労働條件がどうの斯うのと盛んに會社や工場でデモクラシーを唱へる。そこで家へ歸つたらどうかと云ふと、自分の女房にもデモクラシーをやつて居るかど云ふと、そうぢやない。此の調子で亭主關白の位で行くと、今に婦人達……女房達が横暴を見て「此のデモクラシーの世の中に……」とキツトやる。それから小供がそれで今にキツト親に向つて「此のデモクラシーの世の中に少しは小供の人格も認めて呉れ……」なんて云ふ時代も遠くあるまい。



斯う云ふ様に今日の勞働者は稍もするとルツソ一の誤りと同じことを繰返して居る今日地方改善等と云ふことの叫ばれた所以も、日本人が所謂人間意識の發達と云ふことを本當に理解しないで、此のルツソ一の誤りを犯して居る。即ち自分に都合のよい時丈けデモクラシーを使つて居ると云ふことが何より根本原因であると思ふ。そこで人間が各其の立場を考へると云ふことは何より必要で、こゝに更に他の根本原因がある。それは何であるかと云ふと感情である。

### (一七) 感情について

此の感情と云ふものは一口に云つてしまへば、盲目である。感情を指導して行くものが理性です。感情丈けに委して置くとは世の中では、飛んだ間違ひが起る。佛教の經文の中に『金七十論』と云ふのがある。其の中に面白い話があります。昔沙漠の中で大風が吹いて來た。そこで沙漠に居つた人が皆逃げた。處が茲に取殘されたものが二人ある。一人は盲人、一人は覺。盲人は足が立つから無暗に驅けたけれども、方向が判らないから、だんだん深い方へ向つて行つた。覺は眼は見へて向ふに行けば逃げられると云ふことは判つて居るけれども、足が立たぬから逃げられない。そこで恰度この

覺が盲人を見附けて盲人を呼び止めて、そして、お前はそんなに無暗に驅けたつて方向も立てずに逃げたつて駄目だ。俺と一緒にお互に助け合つて逃げようぢやないか。どうするかと云ふと、覺は眼は見えるけれども足が立たぬから、覺を盲人がおんぶして歩く。そうして、ソレ右に行け、ソレ左に行けと指圖するから、其の方向に逃げたらよい。そうしたら兩方共助かると云ふので、二人で逃げてどうく助かつたと云ふ話がある。ドイツの哲學者シュペンハウエルと云ふ人は、此の本を讀んで非常に感心したと云ふ話があります。如何に足が立つても眼が見へなければ駄目で、又如何に眼が見へても足が立たなければ駄目である。之と同じやうに人間は一方に感情は必要であります。感情あればこそ親子の情もあれば、夫婦の情愛も出る。然し乍ら感情のみに委して居ると、感情と云ふものは多くは盲のものであつて、理性の導きを俟たなければ飛んだ處へ飛び込んでしまう。個人の場合でも感情は非常に猛烈なものであります。社會生活に於ては感情は一層猛烈であります。多くの人が寄つた場合に、感情は最も猛烈になる。之は所謂群集心理の上から見たことでもあります。一揆、暴動、ストライキと云ふ様な時に於て、よくも、あんなことまですると思ふ程慘酷なことが行はれる。と云ふのも全く此の感情と云ふものが、多數の人々が寄つた時に非常に猛



烈に勃發する證據であります。

十八世紀の英國の大學者にヒュームと云ふ人がある。其のヒュームと云ふ人が斯う云ふことを云つて居る。其の要點は「理窟……理窟は感情の奴隸なり」といふ一言に盡きる。思ひ切つたことを云ふて居ります。「理窟は感情の奴隸なり。」吾々は理性生活……理性生活をして居るけれども、畢竟するに人間の生活は兎角感情の生活である。理窟は後から附ける。此の言葉は非常に亂暴な言葉である様だけれども、事實である。之はどう云ふことを物語るかと云ふと、吾々は感情を押へて……感情を抑制して、社會生活に於て感情に打ち委かしてはいけなないと云ふことを物語るものであります。人類が二十何萬年と云ふ様な永い歴史から考へますならば、今日我が同胞の中に、地方に依つて差別的習慣或は動作が行はれると云ふことは、全く兒戯に類したことである。而も斯くも人間意識が發達して居る今日に於て、何故其の因習を根絶することが出来ないかと云ふに全く人間が感情の奴隸になつて居る。習慣と云ひますが、これが抑も感情であります。理窟がある譯ではない。事實に於ては何等不都合がないにも拘らず、恰度自分の家では女房を愛して居る……女房を尊敬して居る人で、一步世間へ出れば、なに女が……、あんな者が……などといふ。夫れから女を尊敬して居る人が、或る女の

人と話しをして居る時、どうもあの人は偉い人です。男らしい人ですと云ふが、そうすると女らしいと云ふことは、偉くないのか。そうかと思ふと、優しいことを女らしいと云ひますが言葉と云ふものは全く感情です。……夫れを永く繰返すことが習慣です。元來習慣と云ふことは社會學的に論議すべきことで、社會學の研究に俟つべきことであります。今日はもう時間がありませんから申述べません。

此の感情と云ふものは之を押へるにはどうしたらよいか。之は一つには理解が必要であります。一つには徳を積む必要があると私は思ひます。今日斯の如く理解ある人の講習會が催さるゝと云ふことが、明治維新當時から行はれて居つたならば、差別的因習と云ふ様なものは、今日迄残つては居らなかつたらうと私は信ずる。吾々は随分いろいろな點に於て注意しなければならんが、一方に於て此の感情を押へ、他方に於て此の人間意識を強く唱へると同時に、もう一つ私は注意したいことがある。

### (一八) 客觀に世間を見よ

それは何であるかと云ふと、反省すると云ふことであります。之は如何なる人間にも必要であります。雲に入つて雲を見ず、山に入つて山を見ずと云ふことがあります



が、私は社會生活を爲して居るものは、いつも此の世の中と云ふものを客觀に見る必要がある。向ふに見る必要があると思ふ。須からく世の中を客觀に見なければならん。宇宙の大を悟つて人世觀を得ると云ふことは此の心のうちにある。人間は時々客觀に世の中を見る必要がある。吾々が日本を去つて西洋へ旅行致しますと日本と云ふものが客觀に見へる。日本は色々の問題で騒いで居るが、日本の將來はどうなるかと客觀に見る。進歩だか退歩だか、乃至は順環して居るのか。斯う云ふ様に世の中と云ふものを客觀に見る。之を個人で申しますならば、自分を時々客觀に見る必要がある。之が所謂自己反省と云ふことであります。

明治天皇陛下の御製に斯う云ふ御製があります。

打ち向ふ度に心を研げとや、

鏡は神のつくり初めけん。

鏡は形ちを寫す。即ち自分と云ふものは美麗か穢いか、打ち仰いで客觀に見ると同時に、自分の心を客觀に見たらどうか。

又斯う云ふ御製があります。

柳葉に懸けし鏡も鏡にて、

人も心を研げとぞ思ふ。

鏡は顔を見る。形を寫す丈けに止まらず、心を見よと云ふのが、明治天皇陛下の御製の御趣旨と思ひます。之は私共から云はすと所謂客觀に見る。昔の言葉で云ふなら、之が修養であります。今日日本人が、總て自分を客觀に見て自分と云ふものを修養する必要があると同時に、村に住んで居る人は自分の村は、これでよいか、悪いかを客觀に見る必要がある。一寸自分の村を離れて他所に行くとき自分の村はつまらないと云ふ様な感じが起るであらう。之は各自に就て必要のことでありますから、今回の地方改善の企ての如き場合に於きましても、其の出身の如何なる村の方を問はず、自己反省は勿論のこと、部落として改善すべきことはいかどか。改良を計ることはないかどか、と云ふ様なことを、いつも客觀に見る必要がある。之を大きくして云ふならば、日本國の今のやり方は此れでよいか、どうかと云ふ様なことを客觀に見て、やる必要があると思ふ。昨日米國に於ける排日運動と云ふものは全く之は一種の感情から來て居ると云ふことを申しました。今日の日本の内に於て稍もすると一部に不快の念を起すが如き言葉を弄するものがあると云ふ如き、全く之れ多年の習慣で、一種の根據のない感情から來て居るのでありますから、今私の申しました人間意識の發達



次に感情次に自己修養或は反省と云ふ。此の三つを適當に行ふならば斯の如き問題は、  
 そう永い日數が、かゝらずに解決する問題であると私は信ずるものであります。  
 尙昨日申しました社會病理學の意味から云ふと斯の如き現象は日本の一つの病的現  
 象であります。之が昂すれば結局一種の廢類的氣分を助長するに至りはせぬかと云ふ  
 ことを憂ふるのであります。  
 尙社會の廢類的氣分に就きまして、モ少し時間があつたら述べると昨日御約束致し  
 て置きましたが、モウ時間もありませんから、今回は之を以て終りと致します。私の  
 講習は一向皆さんの御參考にならなかつたと思ひますけれども、折角諸君が御熱心に  
 御聽き下さつたことを感謝致します。

人間意識の發達(終)

大正十三年十二月十四日印刷  
 大正十三年十二月十四日發行  
 大正十四年四月十五日 再版

非賣品 但希望者ニ限り  
 實費十五錢

發行人 今井兼寛

印刷人 刈屋卓一郎  
東京市小石川區大塚下町一五五

印刷所 卓山堂印刷部  
東京市小石川區大塚下町一五五

東京市神田區三崎町一ノ九

地方改革事業叢書  
 人間意識の發達

發行所

財團中央社會事業協會  
 地方改善部

振替東京六八七八九番



地方改善事業叢書

◇既刊◇

文學博士 喜田貞吉氏述

第一輯 歷史上より觀たる差別撤廢問題

實費 金貳拾錢 送料貳錢

廣島高等師範學校教授 長田 新氏述

第二輯 人類教化史上より觀たる差別觀の運命

實費 金拾五錢 送料貳錢

廣島高等師範學校長 吉田賢龍氏述

第三輯 教育及宗教上より觀たる地方改善事業

實費 金拾錢 送料貳錢

福岡女子專門學校長 小林照朗氏述

第四輯 人間意識の發達

實費 金拾五錢 送料貳錢



327  
36



終

